



熱量 1 枚の絵画が放つ LOVE STORY

第 1 章 黒曜石の砂漠



風輝

雪原のような砂漠から北へ向かう。
バフレイアの黒砂漠は、光が照らす玄武岩が輝く神秘的な景観だ。

必切に追われひたすら文字を綴ることに疲弊した凜子は旅に出た。
「漆黒の砂漠は神秘的。宇宙のブラックホール、異次元に吸い込まれるようだ。」
カメラマンの言葉のままだった。

カイロから約10時間。本来の目的地である上海に入る。
上海在住のファッションライター奏子と勢いに溢れる上海ファッションウィークの取材だ。
上海の夜はまるで光る宝石箱、夜の街へ繰り出す。
「凜子、上海の新潮流を案内するよ。なんというかクラブとライブのクロスボーダーってところかな。」
上海の新天地は旧フランス租界の街並みを再現した話題のスポット。最先端のカルチャーが集まる歴史的建造物の地下に、お目当ての「Club 悟空」がある。
「代官山と六本木のリミックスって感じでしょう。そろそろライブが始まる。」
「刺激的ね。」
「そう、新潮流のクラシックよ。」

大きな歓声が沸き、ホールにスポットが当たる。漆黒のピアノが浮かび上がる。
演奏者は全身黒、男性。客のお目当ては彼だ。
曲はドボルザークの新世界、クラシック調で始まる。相当のレベルだ。やがてジャズ調にそして最後はロック調に変わる。
「彼いいでしょう。いま上海で大人気のピアニスト。演奏もすごいけど何ととってもルックスが最高よー。国籍も年齢も素性も非公表、「風輝・FUKI」って名前の他は謎に包まれている。
凜子も不詳の覆面もの書きね、そういえば。」
彼の演奏は素晴らしく美しい。
いきなりエジプトの黒砂漠に行った。このステージはまるで黒曜石が輝く砂漠。引き込まれるようだ。

2曲目はラブソディ・イン・ブルーで最後はベートーベン運命のアレンジだ。
風輝は観客の拍手と共にステージの奥へ消えた。
興奮と感動で、全身が熱を帯びて顔が火照る。素晴らしい夜だった。
ホテルに戻った凜子はスマートフォンでこっそり録音した風輝の演奏を聴きながら眠りについた。

上海ファッションウィークは、アジア系のクリエイターによる絢爛豪華なファッションショーと展示会が連日開催され、上海の中心部がファッションニスタで溢れる。
凜子は黒曜石のイメージでヨージヤマモトの黒。奏子はサンローランの白で決める。

最も旬な上海ブランドのショーへ。ファッション業界に顔が効く奏子とフロントロウで観覧だ。
上海発信のメンズブランドは流線形のデザインでカットイングも素晴らしい。
そして何よりアジア系のモデルがかっこいいのだ。

「もしかして音楽はピアノの生演奏？」

「レア過ぎる。さすが上海発信ね。」

ステージにピアノが置かれクラシックをアレンジした曲が流れる。
モデルウオークとデザイン、そしてブランドの空気感と音律が一体感を生み出している。
まさに感性を刺激する新しいショータイム。
ショーのエンディング、デザイナーと共に演奏者がステージを歩く。
奏子が興奮している。

「風輝よ。話題のピアニストをキャストするなんてさすが上海ね。旬でいて刺激的。」

上海は新しいコトやモノを生み出すパワーがある。

疲弊した凜子がリセットするには最適な地かもしれない。

「奏子、日本での仕事も片付いたししばらく上海にいるかな。そうそう、風輝の動画をお願いね。」

「あとでカメラマンにデータ送信を依頼する。ここ上海は充電するには最適よ。

それにわたしたちは中国系の血が入っているから。馴染みやすいのよね。」

凜子の祖母は上海出身、奏子の祖父母は台湾出身だ。

そのルーツのおかげか北京語はまあまあ問題ない。それに上海は英語が通じるので仕事もしやすい。

「住まいはとりあえず奏子の部屋でいい？」

「十分な広さがあるから気にしないで。」

「今週はホテルで来週に移動する。ありがとう、謝謝。」

商業ベースの原稿は収入を得るため。この業界も若く、安く、簡単が望まれる。

40代はスキル、ギャラ、年齢すべてが高く、クライアントは年下がほとんどで使いにくいようだ。
余裕もあるのでこれからのライフワークを考えよう。

上海滞在は何かを生み出せるかも。

凜子は久しぶりにパソコンを開く。

Club 悟空へ足が向く。混雑しているが、カウンター席に空きを見つけて座る。

刺激的な演奏に負けないように、ドルチェ&ガッバーナのパッションオレンジのブラウスを纏う。

黄金色のモエの刺激が心地よい。

ステージの照明が落とされ、ヴィヴァルディ四季「冬」が・・・。

ヴァイオリンが奏でる厳しい雪や氷の音律とは異なり、ピアノの旋律はやわらかく舞う雪音や氷解する情景が
浮かぶ。絶妙なアレンジで艶っぽくセクシーだ。

やがてエレキギターとヴァイオリンが入り、ロック調の力漲る「冬」へと変わる。

凜子は運河の街ベニスの冬を現すこの曲を毎日聴きながら文字を綴ってきた。

奇跡的にここ上海で風輝の「冬」に出逢うなんて。

ステージはまるで玄武岩が創造した「冬」の黒砂漠。

黒曜石の様に漆黒に輝く演奏家が奏でる「冬」。

凜子は血が逆流するような熱量を感じた。

最終章は超絶テクニックによるシンクロで終わる。ここにしかない「冬」に会場は静まり返る。

そして5秒ほど経つと割れんばかりの拍手と歓声に包まれた。

しばらく激しい胸の鼓動と熱で火照る自分を落ち着かせる。

周囲がざわつく。風輝がまっすぐ凜子に向かって歩いてくる。

いや、そんなはずはないと凜子はシャンパングラスを見つめる。

「ここ、いいかな。」風輝が隣に座る。

ええ！！いまなんて……。

同じく英語で「はい。」と答える。

「ありがとう。彼女におかわりと俺にジンライム。」

風輝の纏う空気感が凜子の嗅覚を刺激する。爽やかなムスク香か……

10年かけてやっと見つけた俺の初恋。

悟空で再会したとき全身が熱るほどの熱量を感じた。

そしてファッションショーのステージから迷いなく見つけた。

今日の偶然に感謝したい。

「ずっとあなたを待っていた。ここ上海で3回目の偶然に興奮している。」

「なんであなたを知らないわたしが……」

「ずっと待っていたんだ。ここで断らないで欲しい。」

「失礼だけど、わたしはあなたよりかなり年上で、外国人でツーリストよ。」

「それが問題なの？さあ行こう。」

風輝は凜子の手を引いて歩き出した。クラブ悟空はいくつものフラッシュが光る。

タクシーに乗り込み上海屈指のデートスポット外灘エリアへ。

上海市内を流れる黄浦江に映る夜景が輝く。

風輝は凜子の腕を掴み、観覧車に乗る。

「黄砂やスモッグで曇る上海も外灘の夜景は自慢できる。」

花火が揚がる。中華風の花火は大きく華やかだ。

「きれい。花火を見下ろすのは初めて。」

観覧車の窓から花火がつかめそう。

「なんでいきなり初対面のわたしを連れだしたの。ひと目惚れとか言ってからかわないで欲しい。」

ずっと逢いたかった彼女と10年ぶりにここ上海で再会できるなんて。覚えていないだろうな。

「視線が捉えた瞬間、身体が熱くなった。そう、血が逆流する感じ。まさに運命だね。あなただけしか見えない。」

黒曜石の瞳に凜子が映る。

さすが音楽家、詩的なセリフが似合う。彼にならからかわれても夢と諦められる。

たった数時間でもこのキラキラは忘れられない。

「連絡先を交換しよう。明日必ず連絡するから無視しないでね。」

凜子は風輝に携帯を渡す。

「登録名は“RIN&FUKI”だよ。」

風輝は凜子の腕を引き寄せ思いきり抱き締めた。爽やかなウッディムスクに包まれる。

夢ならこのまま醒めないで欲しい。

「凜子、なにをしたの？SNSのこれ、凜子でしょう。」

「そうみたいね。」

「悟空で撮られたの？それも風輝と…。」

「わたしのことは誰も知らない。」

「このまま収束してくれることを祈るしかない。凜子、すぐにうちに来て。ホテルは危険よ。」

「住所を送ってね。」

やっぱり泡沫の夢だった。翌日になればすべてが現実に戻る。

凜子はチェックアウトを終えタクシーに乗り込んだ。

“RIN&FUKI”携帯はこのままだとまずいかな……。

奏子の部屋は、中心街からタクシーで10分ほどの閑静な住宅街だった。

7階建てで地階が駐車場、広いエントランスと庭が美しいマンションだ。

ワンフロア2世帯で人の目に晒されないのがいい。そして広い。

用意された凜子の部屋にはシャワーとクローゼットが完備され完璧。

そういえば奏子の実家は相当な資産家だ。

「奏子、いま着いた。いろいろありがとう。」

「冷蔵庫の物は自由に。SNSはまだまだ炎上、外出は控えて。こっちでの仕事の相談もあるから早めに帰宅する。」

運命の女神と誓う

俺にとってスタジオはバイトしながら遊ぶ場だ。

台北 101 のワンフロアに新形態で話題の大型書店 PAGEONE がある。

世界の書籍を取り扱う PAGEONE は、シンガポールに本社があり、出版社、デザインオフィス、撮影スタジオ、ライブハウスなどカルチャーコングロマリットとして成長している。

FUKI はアメリカの音楽院に留学中ながら、彼の率いる A-LIVE は、音楽院生らしくクラシックを自在にリミックスする全米で話題のグループだ。

最旬の CLUB で演奏はもちろん、一流 DJ によるアレンジが大人気。

クリスマス休暇にバンドメンバーと台北だ。

従兄の YUKI が制作する航空会社のプロモーション映像の音楽を依頼されたのだ。

もちろん仕事場は PAGEONE のスタジオだ。

「YUKI、どこの仕事？」

「チャイナエアラインが日本に向けて増便する。日本と台湾それぞれの魅力を同時に発信するので、日本の広告代理店との協業になる。俺は撮影とビジュアル制作だ。メンバーにはホテルと送迎車を押さえてあるので自由に使ってくれ。音は任せたぞ。日本からのエージェントクルーも合流する。」

「了解。自由にさせてもらうよ。映像のデモ見せて、早速ミーティングに入るから。」

スタジオから実に聞き心地の良い、滑舌優れたプレゼンが……。

英語と日本語、北京語が入り混じる感じが面白い。

誰だ？日本語がネイティブらしい……。

「日本在住の台湾人への市場調査によると、キーワードはディズニールランドにシー、UFJ、

水族館に動物園、都会の夜景に富士山、古都。ラーメン、とんかつ、居酒屋といったグルメ。

皆さんの期待している高級ブランドは台北に勢揃いでありきたり、コスメは韓国が伸びています。

日本人が台湾好きなのは、夜市も含めた台湾グルメ、お茶、スイーツ、雑貨、翡翠、マッサージです。台北なら3日あれば十分に満喫できる手軽さも人気の理由です。

よって従来の高級ブランドやレストラン、ホテルより、ウォーカー感覚で〇〇歩きをテーマに、推しのカテゴリで分けてシーン別に発信することです。

「街歩き」「絶景を求めて」「遊ぶ旅」「押しプレゼント 50 選」など

台湾版と日本版を制作。チャイナエアラインの機内誌と空港の宣伝ツールやネットの動画で五感を刺激します。

今回のプロジェクト成功のキーはガイド音声も含めた音です。」

ウエーブのかかる茶色い髪、前髪を揃えたボブスタイルが似合う。

真っ白なブラウスにドレープの入ったワイドパンツは黒、ゴールドのサンダル。

アクセサリはバングル、ピアス、リングすべてカルティエだな。

ボーダレスな雰囲気がかっこいい。

「いい声ながら迫力あるだろう。日本人で素晴らしくクリエイティブだ。」

振り向くと YUKI だった。

「知っている女性？」

「日本での撮影で世話になった RINKO さんだ。」

「かっこいいね。恋人？」

「そうならばいいなと願っている。彼女の望む音、頼んだぞ。」

それが RINKO さんとの出逢いだった。(RINKO さんは俺を知らないけど・・・)

撮影および制作は YUKI と共同作業。恋人同士とスタッフは噂する。

二人はお互いリスペクトして、恋人関係と確信した。

「やはり日本での出逢いは本物だった。どうかこのまま一緒にいて欲しい。RINKO は運命の女性だ。」

YUKI の告白を偶然耳にした・・・

そして RINKO さんの両頬をそっと包み込み、顔を傾け唇を重ねる。

YUKI は RINKO さんの腰に腕を回し抱きしめる。

そして RINKO さんの両腕は YUKI の首に巻かれている。

まるで映画のワンシーンのようなオトナのキス・・・

とても YUKI にはかなわない・・・いまは。

いつか彼女に並べるように成長したい。年齢差なんて関係ない。そう決めた。

「従弟の音楽は素晴らしい。やはりこのプロモーションのキーは音でした。ショパンのアレンジなんてすごい発想、アジアにマッチします。」

「NY の音楽院仲間と組んでいま話題のグループらしい。長期休暇で帰国したんだ。」

「また映像の話があれば一緒にしたいですね。」

仕事は大成功に終わり、台湾の広告賞、作品賞を総なめにする。

台北での授賞式に RINKO さんは YUKI のエスコートで舞台に上がる。

真っ白のドルチェ&ガッバーナのパンツスーツの RINKO さんは、輝いているだけでなく、たまらなくかっこいい。

俺の女神だ。彼女の隣に並びたい、恋人として。

女神との再会 もう離さない

出逢いから10年。俺は上海とNYを拠点に音楽活動している。
そして上海で女神と再会した。

SNSは昨夜から大騒ぎだ……。RIN&FUKIにメッセージを入れる。
<明日の夜、20時からライブがあるので行きましょう。食事はそのあとで…。地図を送ります。FUKI>
上海カルチャー発信の街で「悟空」からも近い。

「凜子、こっちでしばらくゆっくりしたら？仕事もビザも問題ないから。それに住まいもね。」
「うん、3か月はのんびりしたい。でもいきなりSNSで顔出しとはね。北京語が少しわかるってのも、うっ
とおしいけど。」
「数日の辛抱よ。いままさに旬のスターだからね、風輝は。そしてファッションウィークときてる。」
「明日、デートのお誘いがある、風輝さんから。」
「え？？本気モードなの？？彼ってかなり年下君でしょう。」
「せっかくだからデートします。美容サロン教えて。ネイルもね。ホテルのロビーに19時だから。」
「了解。服は？新調する？」
「セリーヌのパンツスーツにする。」
「ははーん、白ね。勝負服ですか……。」

19時前、指定のホテルロビーに。
ゆったりとしたソファでコーヒーを飲みながらエントランスに目を向ける。
マセラッティの白いモデナが正面に横づけ。
風輝だ！
ルイヴィトンのレザージャケットにブラックスリム、シルバーのブラウスと新作だ。
今日はモノクロカップルね。風輝はホントかっこいい。
周囲の視線を独占している。やっぱり姉弟にしかみえないか……
こっちにまっすぐ歩いてくる。ロビーが一層ざわつく。FUKIと気づかれたようだ。
「RINKOさん。さっそく出かけましょう。」
RINKOの手を握って歩く

車内は真っ白い内装で美しい……。さすが一流のアーティストだ。
「まだ時間があるのでリパークルーズはいかがですか。黄浦江からの夜景は上海ならではの……。
この時季の花火は美しいです。」
中国の花火は爆音で大玉……。日本の繊細さはなく豪快だ。
川面に映し出される夜景と花火は、まるで絵画のよう。
なによりFUKIの横顔が美しい。

外灘エリアは西洋建築が立ち並ぶカルチャースポットだ。

歴史的洋館の地階がライブハウス。

「仲間が演奏するんだ。飛び入りで俺のバンドが入る。」

「演奏するの？」

「うん。楽しみにしてね。RINKO さんのために弾くよ。」

うわー、この台詞サイコー！！とろけそう。いまだけでも溺れていたい。

「リクエストは？」

「ヴィヴァルディの冬。」

演奏は FUKI の音楽院時代からの仲間 A-LIVE だ。

クラシックをベースに様々にアレンジされ、楽器もヴァイオリン、ピアノ、エレキ、ドラムなどあらゆる種類を自在に操り、まったく新しい音が生まれる。

CM やドラマで流れる曲が多く人気のアーティストであることがわかる。どこでも耳にする心地よさがここにある……。

照明が落とされる……いつの間にか FUKI がステージに。観客は突然の登場に狂喜乱舞。

ヴァイオリンからエレキギターに……ピアノに電子音が重なる。

旋律が絡み合って彼らだけの音を奏でる。

次世代のヴィヴァルディ、冬だ。

夢でいいからいまこの時間を存分に堪能したい……彼と共に。

割れんばかりの拍手と歓声に包まれステージを降りる風輝。

フラッシュが眩しい。わたしの腕を捉え外に出る。

そのまま走って数軒先のアンティークな門をくぐる。

庭園を抜けると屋敷を改装したレストランだ。

「せっかく来たんだから美味しい上海料理で。俺の好みだけど気に入るかな。」

広いフロアはすべてリザーブ仕様。といっても堅苦しくない雰囲気がいい。

ライトアップされた噴水がきらめく眺望美しいテーブルに案内される。

「ここの料理は美味いよ。」

「よく来るのかしら？」

「スタジオにテイクアウトを頼むことが多いかな。あと打ち上げも……。」

給仕担当の男性か・・・

「風輝様、紹興酒はいつもののでよろしいですか？」

「10年で。この人は長崎のチャイナタウンの生まれだよ。実家は有名なチャイニーズレストランだ。」

「それは緊張が増しますね。長崎といえば翠月楼さん。」

「ええ、わたしの実家です。」

「なおさら気を引き締めてかかります。」

「前菜盛り合わせ、搾菜に焼き小籠包。鶏の蒸し煮に豚の角煮。上海蟹と焼きそばに麻辣湯。
二人だから量はお任せします。デザートはライチゼリーがいいかな。」

「どうして長崎が実家だって知っているの？」

「RINKO さんのことなら何でも知っている。」

「・・・・・・・・・・。年齢も離れていると思うけど。」

「ヒントは10年前、チャイナエアライン。」

「え????」

「音は俺だよ。YUKI は従兄なんだ。」

「顔は合わせていないよね。」

「うん。いつもスタジオから見てた、RINKO さんを。シンガポール、バンコクでの仕事も。」

「・・・・・・・・・・。」

「いつも YUKI と一緒だから近寄りがたくて。10年目でやっと会えた。」

記憶が曖昧だ・・・・・・・・。もっと若いときに出逢いたかった。かなり年下だよな。

テーブルには見映え美しい上海料理が、ヘレンドのシノワズリシリーズに盛り付けられている。
ヘレンドグリーンに料理が一層映える。
琥珀色に輝く紹興酒はバカラのマッセナ。甘い香りが鼻腔に広がり舌がとろけるようだ。

「翠月楼の広東料理よりカジュアルでちょっとヌーベルキュイジーヌでしょ。」

「すごく美味しい、兄に教えます。きっとすぐに飛んでくるよ。」

RINKO さんのことは何でも知っている・・・・・・・・。YUKI と別れた理由もね。

もう何年になるかな、YUKI から去って。

ここ数年の記憶がすっぱり抜けているわたしにとってすでに忘却の彼方だ・・・・・・・・。

翌日、予想通りに SNS は RINKO と FUKI の2ショットで大騒ぎだ。

リバークルーズ、ライブハウス、レストラン、BAR それぞれしっかりと撮られている。

RINKO の顔はぼかしているが、知り合いが見れば一発でわかる。

奏子から電話だ。

「凜子、FUKI が SNS でコメントしたよ。多分住まいも割れているから外出しないでね。コメントはちょっと痺れちゃうね。FUKI かつこよすぎ。」

凜子は風輝のコメントを開く。英語と中国語だ。

「ここ数日俺のプライベートがいろいろと騒がれている。俺は大切な彼女を全力で守るつもりだ。どうかそつとして欲しい、彼女が離れてしまうのが怖い。いまは本当に幸せだ。」

堂々としたコメントは大方好意的に取れられていたようだ。数日後には収束するだろう。

RIN&FUKI に着信。

「RINKO さん、ごめんなさい。北京語がわかるって先日知ったから、対処が遅れて傷つけてしまった。どうか許して欲しい。俺は RINKO さん一筋だから覚悟してね。」

「気にしないで。数日は外出が難しいかも……。そのうち落ち着くでしょう。」

そんなことより、YUKI の従弟だったなんてほんとびっくり。

いま再会するのって運命かしら。

もうあまりにも昔のことで忘れていたくらいだ。10 年かな。

10 年前はなんとなく思い出せるが、ここ 5 年程の記憶はない。蒼の話だと事故で頭部にケガをしたのが原因らしい。海馬の一部が衝撃を受けたせいとか……。

療養のために猫の琥珀と長崎に戻った。

周囲もあえて触れないし、仕事や生活に支障もないので、そのうち記憶が戻るだろうと楽観している。あまり思い詰めるとかえって苦しむことになるそう。

その頃からなのか、左手の中指と耳に美しいイエローダイヤが変わらず輝いている。

翔からのプレゼントというが違う気がする。でも贈り主は思い出せずにいる。

パートナーの琥珀の瞳と同じ色のバングルは、事故の際に割れてしまったとか。

御守りとして欠片の一部をキーホルダーにリデザインした。

どのアイテムも馴染んで凜子の一部のようだ。

FUKI は毎日何度も電話をかけてくる。

スタジオにいれば RIN&FUKI にメッセージがまるで会話のように入ってくる。

いくつも年下とはいえ、FUKI のメッセージに癒され、心が落ち着く。

「凜子、年下わんこ系男子にはまっているね。うらやましい。」

「たしかにわんこかも。琥珀より幼い気がする。友達以上恋人未満って感じ。それにいまだけよ。彼の周囲には若くて美しい女性がたくさんいるからね。わたしはただの一般人でツーリスト、そしてハンパない年上で誰

も認めない。その上記憶が飛んでる心因的疾患者でもあるしね。」

「なにごとも心機一転、ゼロから始めるっていいんじゃないかなあ。記憶が戻る方がいいことだと限らないでしょ。脳が自己防衛したのかも。どんどん新しいことを積み重ねて、記憶が戻ったら柔軟に受け止めればいいんじゃないかな。」

「蒼もそう言ったなあ。」

「兄貴のアドバイスなら間違いないよ。」

「FUKIには言いたくない。」

「必要ないし、いま考えても仕方ないでしょ。(できるなら思い出さずに幸せになって欲しい。)」

RINKOさんはイエローが好きなのか。イエローダイヤのリングとピアスをずっとつけている。大切な人からの贈りものなのか・・・奏子に聞いてみよう。

「FUKIです。奏子？」

「あら、いま上海で最旬話題のFUKIからなんて光栄だわ。」

「奏子、教えて欲しい。RINKOさんのピアスとリングはなにかあるの？」

「イエローダイヤがしっくりくるみたいよ。似合うしね。次兄からのプレゼントとか。」

(ほんとのことは言えない)

「そっか。いつも同じだから気になって。」

「FUKI、RINKOに真剣なの？」

「もちろん、10年間の想いが叶うならなんでも受け入れるよ。」

「外野がうるさい恋愛になるね。」

凜子はどうかな。

「もうそれも終わり・・・一貫してノーコメントで堂々とつきあうから。」

最愛の人を離さない。

RINKOさんとお揃いのブレスレットはどうか・・・探してみよう。

FUKIは旧租界エリアの外国人住宅街に住む。

アメリカのレコード会社代表宅で、縁あって譲ってもらった洋館だ。

オフィス、音楽スタジオ、ゲストルーム、プールなどがあり、100名程のガーデンパーティを楽しめる。

2階がプライベートエリアだ。

きっとRINKOさんは快適に住めるはずだ。

10年を経て再会したのだから、絶対にこの恋は成就させたい。

「翔さん、中国のSNSに凜子さんらしき人が上がっています。」

翠月楼のチーフが携帯画面を翔に差し出す。

「世界を虜にするNY育ちのピアニストFUKIが深夜のデート。」

派手なキャッチとともに写真が連日撮られている。

隣にいる女性のはっきりとはわからないが近しい人間ならわかる、凜子だ。

さっそく FUKI を検索してみると、国籍、年齢、経歴不詳でベールに包まれた人物のようだ。

炎上すると即日凜子への想いを認めたコメントを出すことで、世間には好意的に受けとめられている様だ。火遊びや気まぐれではなさそうだが、凜子よりかなり若い。

翔は奏子にコールする。

「奏子、凜子はどうしてる？」

「恋愛ごっこを楽しんでいるけど、かなりハイリスクね。超人気の相手は世界的ピアニスト。」

「若そうだね。」

「彼は凜子に夢中よ。10年前から彼女一筋らしい。」

「凜子は年下のイケメンにもてるようだ。そっちに美味しいチャイニーズがあると聞いたので行くよ。」

「FUKI に連れて行ってもらってから常連よ。翠月楼を知っていたらしい。」

「市場調査と仕事を兼ねて近いうちに行く。便利なホテルをお願いします。」

「常宿のリッツのスイートを押さえます。」

「よろしく。」

奏子の住まいの敷地内セキュリティは警備員によって護られているが、ここ数日門の外は記者が待ち構えている。

もうそろそろこの部屋を引き上げる時期だ。これ以上迷惑はかけられない。

ホテルを至急探すつもりだ。

風輝は西岸に向かった。

上海のウォーターフロントと称され、芸術エリアとして毎年上海アートウィークが開催される。

そこに台湾出身のジュエリーデザイナー K.Zhang のアトリエがある。

アートセンターで演奏を依頼された縁で彼女と知り合った。

目的は RINKO に贈るジュエリーをオーダーするためだ。

「FUKI、元気？この頃騒がしいけど恋人ができたのね。だからここへ来た！でしょ。」

「そうなんだ。」

「年上でずっと憧れていた女性でしょ。」

「創造力を膨らませてよ。ブレスレットがいいかなって。」

K.Zhang はスケッチする。

「オーバルの完璧なフォルム、そう無駄を削り落とした完成されたオーバルシェイプで2連に交差。

ひとつはピンクゴールドでネームを刻印。一方はダイヤのテニスブレスレットで2連に仕上げる。

FUKI は同じくピンクゴールドとイエローゴールドの2連で。まさに最上級のペアブレスレットだわ。」

「RIN&FUKI でね。演奏の時もはずしたくないから配慮願います。」

「2週間ほどちょうだいね。すぐにとりかかるから。」

10年越しの想い人

「RINKOさん、いまから迎えに行く。」

「FUKI、周辺に記者がいるかも。敷地内まで入ってきて、ナンバーは警備室に報せておくから。」

「クルマは変えた方がいいね。いつもののは記者も知っているから。黒のJEEPでナンバーはXXXX。」

「了解。」

1時間ほどしてエントランスにスモークガラスのJEEPが横付けされた。FUKIだ。

助手席に滑り込んで敷地の外へ。記者には気づかれなかったようだ。

「もう、ここにはいられない。奏子に迷惑かけそうで……。しばらくホテル住まいしてから帰国するつもり。次兄にも相談してみる。」

「住まいは心配いらないよ、いまから案内する。お兄さんって実業家の？」

「うん。仕事で訪中する時には先日のチャイニーズに連れて行きたいし。そのときは風輝も是非。」

「演奏会に招待します。」

凜子さんの恋人として紹介してくれたらいいな。

JEEPは並木道を抜け閑静な住宅街へ……。20分程で大きな門扉をくぐり抜け邸宅のエントランスへ。

「ここは？」

「俺の自宅兼スタジオ。」

「素敵。さすが一流の芸術家ね。」

「知り合いから手に入れた。印税をつぎこんでね（笑）」

両扉を開けると吹き抜けのフロア、正面に左右に渡るらせん階段、天窓からの光を受けて輝くシャンデリアが美しい。

来客用のリビング、ダイニング、厨房、奥にスタジオとゲストルーム。

階段を上がるとプライベートスペースだ。

2階は風輝のプライベートルームの他に2部屋ある。

「RINKOさんの部屋はここで。」

「え????」

そこは一流ホテルのスペシャルスイート並で120平米ほどの広さ、すべて揃っている。

「しばらくここで俺と暮らそう。記者もいないし騒がれることもない。」

「いくら部屋は別でもいきなり急展開過ぎない？恋人でもないし。」

「これから俺のことを知っていけばいい。RINKOさんは10年前からの想い人だから離れたくない。」

「………………。(恋の予感？もしかして。)」

日中交易は政治とはかけ離れ、良好関係にある。

翠月楼の経営者として翔は中国出張が多い。

今回は翠月楼東京出店に向けて人材スカウトと市場調査、そして一番は凜子の現況だ。

「凜子、上海に入る。夜のレセプションにつきあってくれ。ドレスコードがあるからそっちで調達する。ホテルにはいったら連絡を入れる。」

「わーい！翔が来るなんてラッキー。ブラックカード忘れずにね。」

「まだ帰国しないのか？蒼がそろそろ受診しろって。それに両親も心配している。」

「考えてるよ。そうそう、繊細で斬新なチャイニーズにお連れします。あとライブに行こう。紹介したい人がいる。」

「SNSの彼か？ピアニストとか・・・。」

「さすが翔、情報が速い。彼氏ではないけどね、連絡待っている。」

元気そうでよかった。

こちらで調達した衣服も相当な量だ。なんとか段ボールに詰め込み、日用品ととりあえずの服を大型スーツケース2個に段ボール3箱。

スーツケース1個で上海に入ってから、滞在期間が延びるほど荷物が増えていった。

荷物の引き取りに大型ワゴン車が到着。手際よく運び込み移動先に向かう。

1時間ほどして風輝が迎えに来た。

「中心街をはさんで反対側になるけど便利さは変わらない。移動は社用車があるから安心して。」

「仕事でひとに会うからしばらくリッツに滞在する。」

「終わったら帰ってきてね。俺も今週はスタジオに詰めているから。」

BELLISSIMO (BEAUTY)@Air port

FUKI 宅に移動して3日目、リッツカールトンに移動だ。

FUKI は連日のレコーディングで仲間とスタジオにこもりっぱなし。

凜子は荷物の整理と翔の訪中に合わせて1週間分の支度だ。

「今晚からリッツです。きちんと休養を取ってね。RIN」

メモを残しリッツへ。荷物を預けて翔の用意した迎えの車で空港に向かう。

キャデラックのSUVは快適・・・さすが翔だ。

上海浦東国際空港は地下鉄が整備された近代的な空港で、

上海の中心から東へ30キロ、45分程で到着ゲートだ。

ボードを見ると5分前に機は到着、そろそろかな。

ゲートからオールブラックに身を包んだ翔が出てきた。サングラスが決まってる。

バレンシアガのジャケット、ストレートパンツ、ブラウス、そしてスニーカーすべてブラック。

凜子の目に留まったのは新モデルのキャリーオールバッグ！！あれはいただきだ。

高身長に引き締まったボディはモデル越え。周囲から視線を浴びるのは日常だ。

凜子はヒールを鳴らしながら、翔に駆け寄って思いきり抱き着いた。

翔の広く深い懐に凜子がすっぽりはまる。

「翔、会いたかった。」

「凜子、注目されているよ。」

確かに無数のシャッターが反射する。

凜子は全身ディオールでオールホワイトコーデにサングラス。

最高にイケてるカップルのハグ・・・上海では被写体だ。

「チェックインしてからパーティ仕様をゲットしよう。」

翔と凜子はキャデラックの後部座席に乗り込んだ。

翔と凜子の抱擁ショットがWEBマガジンBELLISSIMOのサイトにアップされた。

絶大なフォロワー数を誇る写真家RUIの撮影となれば一気に拡散する。

上海空港から飛び立つ旅をテーマにしたWEBマガジンで、美しい写真と旬の旅記事が人気だ。

今日のショットは最高にイケてた。被写体が美しい・・・。

ともかくカッコいいふたりだ。国籍不明のボーダレスな雰囲気がいい。

「さすがRUI！まるで映画のワンシーンを切り撮ったよう・・・」

「再会に感激。ツーリスト???俳優?モデル?ドラマ撮影か・・・教えてRUI。」

「ボディに巻かれた腕、胸に埋もれる女性をやさしく抱き寄せる男性の腕がセクシー。」

「RUIのベストショット！最高のラブストーリーだ。」

などなど絶賛コメントが多数寄せられる。

「FUKI、今日アップされた俺の最高ショット見てくれた？」

「RUIか、いきなりどうしたの？いつも最高だろ。」

「芸術センターの演奏とライブは最高のFUKIを撮るから期待して。」

「RUIは俺の専属だからお任せします。衣装はメンバー全員ディオールブラックでいく。楽器はピアノもすべてオールホワイトで決める。」

「了解。」

モノクロのビジュアルに音で色を表現する、さすがFUKIだ。

FUKIは携帯でBELLISSIMOのサイトを開く。

男女が抱き合うショット・・・確かにかっこいい。

うん？？女性はRINKOさんだ。ディオールの白・・・間違いない。ハイスペックな相手は誰？？？

全身血が逆流するように熱量が上がる・・・ジェラシー？？？

「翔はタキシード？」

「日中芸術交流会で文化人や俳優、実業家が出席する。華やかではあるがレッドカーペットはさすがにないと願う。」

「こっちは何事も豪華絢爛だよ。過去のバブル期みたいで好きだな。うーん、バブリーにヴァレンティノにしよう。」

中心街にあるヴァレンティノのブティックにSUVが停まる。

すでに連絡済みか、スタッフ総出で待ち構えていたようだ。

この一流ブランドらしい敷居の高さも魅力だ。

「翔はボンド風でね。ブラックの光沢が美しいテーラードタイプで。わたしはドレープが美しいパンツスーツがいいな。」

「白が似合う凜子はこれだね。」

生地をふんだんに使った滑らかなドレープが美しいパンツスーツを試着。

ディテールも細部にわたり、同じ生地で作ったこだわりの凜子好みだ。

「最高！クールビューティです。」

とスタッフも興奮だ。

「シューズもございますのでぜひ・・・奥様はこちらのミュールとお揃いのミニバッグが美しいかと。」

「翔、奥様だって！兄妹に見えないのかな。翔はヨーロッパでわたしはアジアだから。」

「何より雰囲気重要だよ。サイズを合わせてホテルに届けてください。」

「翔、このスーツに合うジュエリーが欲しい。」

「こっちはパールをする人が少ないから MIKIMOTO に行こう。」

ひと目でわかったのか、日本人スタッフが出迎える。

「いらっしやいませ。パールのご用命ですか？」

「白のパンツスーツに合うパールが欲しい」

「それでしたら希少なゴールドパール 9mm の一粒ピアスがございます。是非ご覧ください。」

「うわーきれい。耳たぶから零れ落ちそう……。」

「揃いのネックレスはあるかな？」

「はい。同じくゴールドパールの 7mm で、長めの 60センチタイプが美しいかと……」

「首輪みたいのは嫌だけどこれならロングでもいいかも。翔、これがいい。」

「ではピアスとネックレス、同じパールでカフスピンもお願いします。ホテルに届けてください。」

「これから上海支社で打合せだ。凜子に紹介したい人がいるから同行して欲しい。」

「ディナーは奏子もいい？」

「是非彼女にも会いたい。日本人が腕を振るう鮎屋に行こう、澤田さん覚えている？いま上海だ。」

「ソウル、台北、香港、NY と各店でよく顔を合わせていたけどいまは上海なんだ。」

「新鮮素材を見極めさえすればどこでも美味しい鮎が食べられる。」

翔のオフィスは浦東新区の高層ビル街にある。

ワンフロアを借り切ったオフィスは眺望が抜群だ。

翔の部屋に大きな絵がかけられている。

引き寄せられるように前に立つ。

まさに空間と一体化したような絵だった。

マットな白からパステルカラーを重ねて塗ったような抽象画……。

ひとが纏う空気感と五感のような、それでいて柔らかく心が癒される……。

「気に入ったか？」

「うん、やさしさとしなやかさと柔らかさ……そして程よい熱量が感じられる。」

「ありがとうございます。あなたの表現は初めてだ。」

いつの間にかひとりの青年が立つ。翔と変わらぬ背丈に容姿は華流スター並みだ。

「凜子、彼は新鋭の画家で龍君だ。RON と呼ばれている。」

風輝と同年代か……

「RON は個展の開催と作品集の出版を準備中だ。日中のハーフということもあり応援している。

若い世代にアピールするプロモーションに力を貸して欲しい。」

「うーん。奏子も交えて澤田さんのお鮎でブレインストーミングってのは？」

「いいね。新しいことが生まれる気がする。」

車寄せにキャデラックが入ってくる。

凜子、奏子、翔、龍が接客係の案内で店内へ。

室内庭園が美しく、池にはお決まりの鯉が・・・。

白木の大きなカウンターに澤田さんの笑顔があった。

真っ白い割烹着に身を包む板前の威勢の良い挨拶が響き渡る。

「凜子様、お久しぶりでございます。最後はソウルでお会いしました。」

「ここでも澤田さんの芸術的なお鮨がいただけるなんてうれしい。」

「これも翔様のおかげです。」

翔は海外を拠点にする鮨店をはじめ居酒屋、料亭、鉄板焼きと店舗展開している実業家だ。

「龍さん、あなたのエアリー感が好き。まるで纏う空気に五感の色を描いた柔らかさに癒される。

奏子、彼の作品にストーリーを入れたらどうかな。絵をメインにファッショナブルなモデルでストーリーを表現すれば、まるで1枚のポートレート。購買力のある40代以上の男女の琴線に触れる。」

「そうそう、やっぱり現代芸術はファッショナブルであるべきよ。WEBマガジンのBELLISSIMOとコラボいいかも。空港の再会と旅発ちの写真が大人気。はまったらすごい話題よ。」

「まさに新しい発信スタイルね。おもしろい。」

「中身が薄ければすぐに消えるけど、わたしたちに任せればゴージャスな1枚になる。

今旬のRUIってフォトグラファーがいち推しかな。」

「決まったな、RON。このふたりにプロモーションをお願いしよう。6カ月後に幕開け、準備をよろしく。」

「スケジュールと予算をすぐにまとめます。」

「奏子の出版社に発注、依頼主はわたしの会社で担当は凜子。しばらく上海だな。」

「翔さん、ありがとうございます。凜子さん、奏子さんよろしく申し上げます。」

「翔の勘と眼力は絶対よ。どうやら帰国はまだかな。」

「近いんだからいくらでも長崎に帰れる。今回はわたしと一時帰国するように。就労証明書やいろいろな手続きもあるから。」

カウンターにはきらきらと鮮度抜群の魚介が並んだ。

「本日は甲殻類が絶品です。エビ3種、かに2種、貝を数種揃えてみました。醤油はつけずに潮の香りをお楽しみください。」

それからカレイの昆布締め、しめ鯖、こはだといった青モノからマグロ、いくら、数の子、そして各自お好みの巻物、メは潮汁。

久しぶりに堪能するお鮨に奏子のご満悦、RONは感激だ。

上海のお鮨、最高！！

「このあとリッツのバーで話題のアーティストによるライブがあります。席はリザーブ済みなので是非。」

「リッツといえばもしかしてA-LIVE??？」

「奏子さんはご存知ですか？」

「もちろん。」

風輝はレコーディングであってもリッツのライブは断らないと聞いている。
もしかして会えるかな・・・。

ジェラシーは恋のスパイス

最上階のバーはガラス張りで上海の夜景が美しい。

バーテンダーの作るきれい色のカクテルを手に談笑する客で大賑わいだ。

入口で黄金色のシャンパンを取り、翔と並んでリザーブ席へ。

正面に YAMAHA のコンサート仕様 CFX が……。近くで見ると特大サイズだ。

「RON さん、アーティストって FUKI でしょ？」

「本人を知っていますか？」

「先日 SNS を騒がせた張本人がここにいる凜子よ。」

「えー！」

「翔さんも知ってた？」

「うちのスタッフが教えてくれたけど、身内しか凜子だとわからないよね。」

照明が落とされピアノが浮かび上がる……………。

オールブラック…風輝だ。

大きく深呼吸して、鍵盤に指を乗せる。

テーマは「CINEMA」 映画音楽だ。

柔らかい音が心地よいニューシネマパラダイス「愛のテーマ」

世界が認めたジブリ、ハウルの城

戦場のメリークリスマス

凜子推しのゴッドファーザー3 カバレリア・ルスティカーナ

素晴らしい演奏だ。

スタンディングオベーション、拍手が鳴りやまない。

無数のシャッターがピアノに反射する。

観客が撮影やサインを求めて風輝を囲む。

「彼が SNS の相手か？」

「うん。」

「つきあっているの？」

「まだそこまでは……………」

「才能も素晴らしいが人気もすごいね。傑出している。」

凜子さんだ……………

隣に写真のオトコがいる。彼氏なのか。RON と奏子も……………。どんな関係なのか。

翔は凜子をかばうように肩を抱きながら店外へ向かう。

風輝は固く拳を握りしめる・・・思いきり熱量が上がる、ジェラシーだ。

あれは被写体のカップルか・・・。

RUI は FUKI の演奏を撮影しながらファインダー越しに二人を捉える。

それにしても様になる。おなじテーブルに芸術家の RON、ファッションディレクターの奏子が見える。いい感じだ。いい予感がする。何かが始まる。

RIN&FUKI に着信

「リッツのライブに来てた？」

「FUKI って本当に最高のピアニストだね。感激！」

「誰と来てたの？」

「奏子と画家の龍さんと翔と。」

1 枚の写真が貼られた。

「これって凜子さん？空港だよね。」

「翔を迎えに行ったんだ。誰が撮ったの？」

「カメラマンの友達・・・BELLISSIMO というマガジンサイトに上がっている。」

アドレスが送信されてきた。

開くと凜子と翔の抱擁シーンに多数のコメントが寄せられている。

うわっ！すごい。それで彼は不機嫌なのね、かわい過ぎる。

「ほんとだ。さすがプロが撮るとかっこいいね。わたしじゃないみたいだ。もしかして妬いてる？」

「そーだよ。俺は妬いている。抱き合っている写真を見て思わず心配や不安、怒りを覚えたよ。

血が逆流している。」

「翔は兄貴です。こちらでビジネスをしているんだ。RON さんのパトロンとして、奏子とわたしはプロモーションの仕事を頼まれたの。食事のあとに RON さんからリッツのライブに誘われたんだ。

そして最高に輝く FUKI に逢えた♥」

♥が付いてる・・・

「よかった。安心した。RINKO さんは一瞬も離れがたい俺のいとしい人だから♥♥♥」

「また連絡ちょうだいね、レコーディング頑張ってる。」

翔との 2 ショットのおかげで、彼の想いが聞けてうれしい。ジェラシーって恋の最上級スパイスね。

「RUI！！超話題の空港 2 ショット、女性は俺の彼女で相手は兄貴だって！もう血が逆流したよ。」

「兄妹だって被写体としては最高のラブシーンさ。ライブにも来てたから撮ったよ。

ホント雰囲気がかoolで、大人の男女ってのが最高。年間大賞はいただきだな。」

風輝はプロモーション動画の撮影に入った。

凜子は翔のオフィスで RON の PR プランを構築しながら、絵に合わせたエッセイを書く。

奏子は絵をメインにしたビジュアルをデザイナーと打合せ。

「カメラは RUI に依頼する。RON 知ってるよね。」

「もちろん。いま一番クールなカメラマンだよ。」

翔は相変わらず上海、北京と会合が続く。

リッツから 4 日後の夜、西区の芸術センターでレセプションが開催される。

日中文化交流会という名目で、経済界、政界、資産家、芸能界など様々な分野から選りすぐったセレブが集結する。

「翔、中華圏の俳優はめっちゃかっこいいしきれいだよね。まさに目の保養。」

「芸術分野でも優れた人材が多いし、料理界も世界に認められている。やはり日本の約 10 倍の人口だけに逸材も多いのだろう。」

「容姿端麗で実力も備えてクリエイティブでも世界をリードするなんてさすが大陸だね。」

翔と凜子に乗せたキャデラックのリムジンが車寄せにつける。

ジェームスボンズ並みに光る翔が降りると、一斉にフラッシュ。経済界の重鎮が握手で迎える。

翔の手を取って真っ白のパンツスーツの凜子が続く。眩しい……………

ふたりは腕を組み会場内へ。

「挨拶があるから凜子はバイキングを楽しんでおいで。この国のバイキングは多種多様でとにかく美味しいから。」

翔はタキシード軍団のテーブルへ向かった。

凜子はバイキングコーナーへ。

中華、和食、イタリアン、フレンチ、エスニックと各シェフによってスピーディに調理されていく。

特に飲茶コーナーは離れがたい……………いくつもの蒸籠が積み上げられていく。

アルコールも各国ワイン、ビールからシャンパン、紹興酒、日本酒、カクテルとバーテンダーによってサーブされる。

少し高くなったステージに真っ白いピアノが置かれスポットライトが当たる。

そして旋律が……………

ベートーベンの「歓びの歌」を独特のアレンジで奏でる。

美しい旋律……………演奏者は FUKI だ。

出席者は視覚と聴覚がひきつけられる……………

オールブラックの衣装とオールホワイトの楽器のモノクロームなコントラスト。

そしてその美しい横顔と流れるような大きく長い指。

メドレーのようにベートーベンからエルガーの「威風堂々」に変わる。

1 台のピアノがまるでオーケストラのように旋律がシンクロする。

クラシックを自在にアレンジして唯一無二の世界を創り上げる。

これが FUKI、A-LIVE の演奏なのだ。

鍵盤から指が離れる……………音がひいた途端に割れんばかりの拍手と嬌声が上がった。

メンバーは笑顔で深くお辞儀をする。

そして FUKI は観客の渦を掻き分け、まっすぐ凜子に向かっていった。

無数のフラッシュを浴びながら凜子の手を引き翔の前に立つ。

「RINKO さんを無事送ります。」

「凜子をよろしく。」

ふたりは会場をあとにする。

FUKI か……。若いのに堂々とした振舞いだ。常人とはかけ離れた才能と力を持っている。

風輝は凜子の手を取りずんずん歩いていく。

会場から数分で体育館のような建物へ。

多種多様な楽器が置かれた歌劇場のようだ。

もちろん舞台も備わっている。

「ここは？」

「見ての通り劇場だよ。いまはリハーサルに使われている。」

「誰もいないみたい。」

「ふたりっきりで話がしたいから。」

凜子は風輝と向き合う。

黒曜石の瞳に凜子が映る。吸い込まれそうだ。

「凜子さん、俺たちつきあっている？」

「風輝のジェラシーがうれしかった。わたしはあなたが好き。ただいろいろと素直になれなくて……。」

「なんで？」

「年の差もあるし、日本人だし、あなたは超有名人だし……ファンもたくさんいるでしょ。」

「それがなに？俺が RINKO さんを守る。それに RINKO さんは芸能人ではないし、堂々としていればいいよ。ノーコメントを通していればそのうち収束するから。」

「……………」

「言い訳なしで俺を信じて欲しい。10年間の想いを受け取ってください。」

凜子はじつと風輝の告白を聞いている。そして顔をあげる。

「ありがとう。あなたは贈り物のように現れて、わたしを変えてくれた。だから失いたくない。」

「俺は全力で凜子さんを幸せにすると誓う。」

凜子はつま先立ちになり、風輝の背中に腕を回して唇にそっと触れた。

突然のキスに風輝は一瞬戸惑う。

そして風輝は顔を傾けて、凜子の頬を包み込みながら唇を開いていく。

ずっと思い続けていた凜子とのキスに熱量が上がる。全身鼓動が響くようだ。

凜子はそっと自分の唇に触れた。

風輝の唇は柔らかく温かい……胸の鼓動が激しくなった。

ずっと忘れていた感覚が甦る。恋っていいな……。

翌朝、室内でつながっている翔の部屋へ向かう。

(二部屋のスイートがつながっているダブルスイートだ。)

「朝食が届いているから一緒にどう？」

「うん。翔は昨夜遅かったの？」

「仕事関係だから断れなくて仕方なく。凜子は無事に送ってもらったのか。」

「うん、その日のうちに戻ったよ。」

「才能あふれる最上級の彼氏だな。。」

「また SNS で騒がれているよね。」

「気にすることはない。彼は堂々と凜子を連れ去ったし覚悟ができてるんだろ。」

「カラダの熱量が上がる感じが久しぶり……。いろいろな記憶の欠片が合わされる感じがする。」

「そのうちすっきりするさ。1時間後に出勤だ。オフィスは用意されている。」

「はい。」

ショート丈のレザージャケット、イレギュラーヘムのスカートに白い光沢のあるブラウス、ショートブーツ。アクセサリはすべてカルティエ3連シリーズでシックに。バッグはたっぷり入るジミーチュウの新作で。ホテルのロビーに降りると、裏地が美しいエトロのオレンジジャケットに紺のブラウス、白いパンツ、ベルルティのスリッポンの翔が座っている。

はああ、兄とはいえ本当かっこいい。独身主義だけに超モテモテだ。

ビジネス街に入って翔の36階オフィスへ。黄砂やスモッグがない日の上海の眺望は素晴らしい。

しばらくはここでPRの仕事だ。

いまでもこれからも凜子さんだから・・・

「奏子、凜子の彼の連絡先知っている？」

「翔さん？はい知っています。」

「教えて欲しい。彼は凜子の記憶喪失のことは知らないよね。」

「わたしだけしか知らないの。」

「はい、FUKI」

「凜子の兄の翔です。昨夜は素晴らしい演奏でした。」

「ありがとうございます。」

「今晚時間ありますか？お会いしたいのですが・・・。」

「21時からラジオの収録がありますので、19時にラジオ局でいかがですか？そちらのオフィスから車で10分程です。」

「では19時に伺います。」

ラジオ局のエントランスには黒塗りのワンボックスカーが次々と入ってくる。
業界人の送迎車のような。

ひととき大きなキャデラックのSUVから翔が降りる。

ロビーに入ると一斉注目を浴びる。

奥から声がかかる

「翔さん、お待ちしていました。」

全身トータルブラックの風輝。上背は翔と変わらずアルマーニのブラックが良く似合う。

凜子が惚れるだけあってFUKIはかなりハイスペックだな。

凜子さんの兄貴は俳優越えのカッコよさ、まさに大人のオトコだ。

「お忙しいスターに時間いただき恐縮です。」

「いえ、翔さんも相当多忙でしょう。すぐ会うことになるだろうと思っていました。こちらへどうぞ。22階になります。」

局内に入ってしまうと芸能人や業界人が当たり前なので騒がれることもない。

フロアは広く、打合せスペースになっている。

さすがに翔と風輝となると注目の的だ。

テーブルにコーヒーが置かれた。

「凜子とはいつごろからの知り合いですか？」

「10年前からずっと想い人です。チャイナエアラインの仕事で凜子さんを知りました。その頃はまだ音楽院の学生で声もかけられなかったんです。」

「年が離れている様だ。10歳ほどかな？」

「さあ、正確には・・・気にしたこともありません」

「年齢関係なく凜子もあなたを好きなようです。今日は覚悟を決めてきました。FUKI さんもそのつもりでお願いします。」

「はい。他言しません。」

「ありがとうございます。凜子は解離性記憶喪失、あまりにも衝撃的な体験をするとその数年の記憶がすっぽり抜ける。自己防衛なのか脳の病気であることは確かだが、いつ記憶が戻るかはわからない。」

「・・・・・・・・。戻そうとはしなかったんですか？」

「思い出した時に本人が受けとめられるかが不安なんだ。だから無理に治療はしない。兄が医者ってこともある。記憶が戻ったときこれからの君との恋愛に支障が出るかもしれない。その若さで凜子を受けとめられるのか・・・・・・・・。自信がなければ今のうちに離れた方がいい。」

「いえ、離れるつもりなんてありません。10年待ってやっと思いが通じたのに・・・・・・・・。これからたくさん素晴らしい記憶を重ねていけばいい。一緒にいられたらそれでいいんです。」

「たとえ愛の記憶であっても？凜子は事故で婚約者を亡くした、目の前で。その衝撃で記憶を遮断してしまったんだ。」

「もう、起こってしまったことは変えられません。拒絶されても、受け入れてもらえなくても凜子さんを待ちます。だから翔さんも俺たちを見守ってください。記憶が戻るのを恐れることはありません、いまの凜子さんも過去の凜子さんも俺の想う凜子さんだから・・・・・・・・いままでも、いまも、これからも変わらない。」

「何かあったら報せて欲しい。」

「わかりました。この先時期を見てプロポーズするつもりです。まだ時間はかかるかも・・・・・・・・。いまはまだ彼氏に昇格したばかりですから・・・・・・・・」

「応援する。」

蒼が言うように記憶を失くしたことは必ずしも悪いことではないのかもしれない。

こうして新しい扉が自然と開く。

恋人を亡くした凜子と10年待ち続けた彼は運命か・・・・・・・・。

Airy Feeling～逢いたくて

翔の部屋に飾られている絵の前に佇む凜子……

柔らかい空気感、程よい熱量、春の香り、それらを色で表現されたこの絵に癒される……

いろいろな想いが重なり合う

まるで失われた記憶がやさしい色の重なりに映し出されたかのよう……

タイトルは無題とある。

画家自身タイトルをつけかねて無題と称することが多いらしい

タイトルは

「Airy Feeling ～ 逢いたくて」

ビジュアルは絵の前に佇み手を差し伸べる女性と男性の2バージョン。

逢いたい想いに包まれる。

男女がそれぞれの逢いたい想いを色で表現する RON の感性が生きる。

RUI、RON、奏子、凜子が集結。

凜子が開口一番

「まずは Airy を最初に打ち出す。話題になればその他の作品は何もしなくても買い手がつく。この作品に集約したいけどいかが？なるべく分散したくないし、RON にフォーカスしたいから。」

「賛成！作品集の前にポスターで街中ジャックってのはどうかな。」

「クライアントは上海空港と BELLISSIMO か。交通広告は華やかなデビューになる。」

「さすが RUI! まずは上海空港からセンター街まで Airy で飾ろう。」

「抽象画がメジャーの主演になるなんて……画家としてこの上ない幸せだ。」

「まずターゲットは上海浦東国際空港ね。日本の諺で（ヒトの禪で相撲を取る）っていうのよ。」

RON の 1 枚の絵に凜子の言葉、RUI のビジュアル、そして奏子のディレクションが融合する。

夜は風輝の招待で Club 悟空へ。

A- LIVE の演奏だ。テーマは「愛」

どんな選曲でどんなアレンジになるかワクワクする。それは溢れる観客も同じだろう。

凜子はダナキャランのシャツジャケットにワイドパンツ、スパンコールのタンクトップでブラックコーデ。

翔は同じくダナキャランでジャケットにストレートパンツ、インナーはクルーネックのシャツで凜子同様のオールブラックだ。

奏子は勝負色の赤で決める。切り替えが美しいドレープのワンピースに黒のジャケット。

RON はヨージヤマモトで藍色のスーツ。

RUI は撮影だ。

愛がテーマのクラシックアレンジ。

スポットが照らすと全員真っ赤な衣装だ。

ヴァイオリン、チェロ、ドラム、エレキギター、サックス、そしてピアノ。

A- LIVE は、演奏技術はもちろん、唯一無二のアレンジ、そして全員が容姿端麗とくれば驚異的な人気も納得だ。

リスト「愛の夢第3番」を風輝が奏でる・・・さわりはクラシックそのもの。素晴らしい

それからヴァイオリン、チェロが入りアップテンポへと変調し、最後はエレキ、ドラムが加わりロック調に。メンバー個々が最上級の演奏家、よくこれだけの才能が集結したものだと言葉に感謝する。

そのまま切れることなく

「エルガーの愛の挨拶」

これはヴァイオリンとピアノがメインで始まり、ドラムがリズムを取り始めチェロが入りジャズ調に。

確かにエルガーだが印象がガラッと変わる。いろいろな楽器が重なることで古典的な譜面が新しく刷新されるようだ。

最後は「ブラームスの間奏曲」

これはオーケストラで演奏される曲だが、それをまるで歌謡曲のように軽くしかもポップなリズムに変えていく。

この3曲によって古典的なクラシック愛が、現代の素敵な LOVE へと生まれ変わったようだ。

本当に素晴らしい。パフォーマンスなんてあまりにも軽い言葉だ。そう、現代芸術だ。

演奏前に FUKI からメッセージがはいった。

「RINKO さんのために演奏するよ。今日の曲はリスト、エルガー、ブラームスと俺の好きな作曲家で、凜子さんのためにアレンジしたよ。愛してる。FUKI」

悟空から FUKI 行きつけのチャイニーズレストランへ。

先日の支配人がお出迎えた。

「ようこそ、お待ちしていました。翠月楼のオーナーがおいでとは緊張します。それに今話題の方ばかりで卓がにぎわいますね。どうぞこちらへ。」

「こちらこそ素晴らしい味を堪能させていただきます。」

今夜は気の合う仲間と、見て楽しく 食べておいしく 五感を満足させる上海グルメを堪能する。

「翔のご馳走だから遠慮なくいただきますよ。」

「紹興酒のおすすめは？」

「風輝様は10年物を用意されていますが。」

「ぜひ。」

飲茶は上海ならではの。

小籠包、海老蒸餃子、大根餅、はるまぎ、絶品は海老ニラのパイ包み上げだ。

「美しい、特に蒸餃子と包み上げは独特な形状だ。さすが飲茶専属のシェフだけある。」

翔は飲茶のフォルムの美しさに感激する。

前菜は

定番3種の盛り合わせに、冷やし豚肉薄切りニンニク醤油添え、蒸し鶏の麻辣ソースかけ

「このニンニク醤油は絶品だ。隠し味は紹興酒か……。」

海鮮は

ふかひれの煮込み

海老の水晶炒め

芋で鳥の巣のような形状に揚げた中に海鮮が彩りよく炒めて盛り付けられている。

「これはぜひ取り入れたい。籠状というのが面白い。」

肉類は

鶏肉と松の実炒めレタス包みは香ばしい

黒酢の酢豚に上海式角煮

豚と卵ときくらげの炒め物

「翔、麻婆豆腐は土鍋だったらお願い。」

「凜子はどこでもオーダーするな。」

そして

カニとショウガのチャーハンに酸辣湯

黒酢が美味しい。ここの黒酢は翠月楼でも仕入れよう。

担々麺、上海ワンタンに上海焼きそばが並ぶ。

どれもこれも紹興酒にピッタリな料理だった。

デザートは凜子推しのライチゼリー

最高の高山烏龍茶とプーアル茶をいただく。

「翔さん、いかがでしたか？」

「風輝君、今日はいい勉強になったよ、翠月楼もまだまだだ。ありがとう。」

「凜子さんをお借りしても？」

「はい。きちんと送り届けてください。」

一同、大満足の食事会だった。

「翔さん、ごちそうさまでした。またよろしくおねがいします。」

「どういたしまして。是非長崎にもいらしてください。観光地としてもなかなかですよ。ご案内します。」

FUKI は K,Zhang のアトリエに。

「今晚は悟空でライブでしょ。オーダーの逸品は上がっているよ。」

見せられたのは完璧なオーバルフォルムの2連ブレスレット、ペアだ。

「彼女はダイヤのテニスブレス型にピンクゴールド、FUKI はピンクとイエローゴールドの2連ね。演奏しても動かないデザインよ。ついでに同じデザインでピアスも作ったから。いいでしょ。」

「素敵だ。さすが一流デザイナーだな。ありがとう。」

「次はプロポーズね。またよろしく。」

「まだそこまでいなくて……」

「FUKI が足踏みしてるわけ？」

「まさか。俺は明日にでも結婚したいよ。彼女がまだ俺に惚れてくれないみたいだ。」

「え!!!信じられない。このハイスペックでまだ実らないなんて。彼女って何者??」

「うまくいったら連れてくるよ。」

凜子と風輝はタクシーに乗り込んだ。

「スカイリングまで。」

「どこなの？」

「上海の古き良き街並みが残る商業施設の屋上にある観覧車のこと。俺が好きなんだ。」

FUKI はお気に入りの観覧車内でブレスレットとピアスを贈ることにする。

「これは日本には絶対にはない観覧車だ。わたしが観覧車好きって知ってた？」

「最初のデートですごく喜んでたから。」

ゴンドラ内は無線で好きな音楽を聴くこともできる。

スイッチを押すとゴンドラの照明の色が変わる。

眺望は上海名物のプロジェクションマッピングが華やかだ。

FUKI が先日のライブで演奏した「愛の夢」が流れる。最高だ。

「凜子さんにプレゼントがある。恋人記念に。」

FUKI はポケットからブラック&ホワイトのボックスを取り出した。

こちらに向けて開けると、流線形の美しいブレスレットとピアスが……

FUKI は凜子の腕を取りブレスレットを通す。

凜子は耳からピアスはずして、FUKI から贈られた2連のピアスをつける。

「ブレスレットとピアスがお揃いなんて素敵！オーダーね。」

「喜んでくれてうれしい。実は俺もお揃いでカップルブレスレットなんだ。」

FUKI は左腕の袖を捲る。そこにはピンクとイエローの2連ブレスレットが。

いつもイエローダイヤのピアスをつけているからどーかなって。」

「うれしい。もちろん今から2連ピアスよ。ブレスレットもレギュラーよ。だってペアだもん。」

凜子は向き合う FUKI に身体を寄せてキスをする。

FUKI は凜子のうなじに手を当てて引き寄せる。熱いディープキスに酔いそうだ。

凜子は有名な音楽家である FUKI の恋人であることが不安だった。

彼はそんなこと微塵も感じることなくいつの間にか恋人に……。

彼を取り巻く環境はもちろん、年齢差や日本人であることを考えないわけにはいかない。

でも今が何よりも大切だからもろもろのことは後から考えればいい。

いまはこの輝く恋人とキラキラした恋を思いぎり楽しみたい。

今回の仕事では翔が所有するコンドミニアムに6カ月程滞在する。

その期間に、上海滞在の準備（翔の会社まかせ）と蒼の診察、両親に報告を兼ねて数週間ほど日本に帰国。

空港には蒼が出迎える。

「蒼、好きな人ができた。毎日が楽しくて。体調もいいんだ、頭痛もしないし。」

「なんか思い出したりすることある？」

「特になし、別に無理に思い出さなくてもいい。」

「恋人って SNS で話題になった彼？確か有名なピアニストとか。」

「10年前から知り合いだったらしい。」

「一段落したら長崎に連れてくるといい。凜子もずっと上海にいられないだろ。」

「うん。琥珀もいるしね。」

「琥珀はいつの間にか我が家の主だ。心配ない。」

凜子の耳たぶからイエローダイヤがなくなって、2連のブレスレットとピアスに。

リングはそのままなのでまだプロポーズまでいっていないようだ。

どうかいきなり過去を思い出さないで欲しい。

凜子自身はもちろん、相手が受けとめられるとは思えない深い傷だ。

数週間後、超多忙な翔はそのまま日本に、凜子だけ上海に入った。

到着ゲートに降りると空港スタッフが駆け寄る。

「凜子様、お荷物はこちらで引き取り目的地までお届けしますので右手の出口へどうぞ。」

後ろからついていくとVIPラウンジへ案内された。

「こちらでお迎えの方がお待ちです。」

扉を開けると風輝が……。

凜子は思いぎり風輝の胸に飛び込む。

風輝が凜子を抱きしめる。

「風輝に会いたかった。」

「もう1日だって離れたくない。明日までOFFだから、ゆっくりしよう。」

従業員専用のパーキングから真っ白のモデナが走り去る。風輝の自宅へ向かう。

すでに凜子のスーツケースは運ばれていた。

「食事が届いたら声をかけるからそれまでゆっくりしてて。」

「荷物を片付ける。ありがとう。」

風輝は食卓を飾り、凜子の部屋へ。ノックに返事がないのでそっと部屋に入る。

凜子はソファでうたた寝をしていた。その寝顔に思わずキスをする。

「凜子さん、食事ですよ。」

「うーん、わたしねえ FUKI に言ってないことがある。もうあなたがいないとダメなの、ずっと一緒にいてくれる？」

「俺も、凜子さんしか考えられない。これから一生かけて全力で愛する。」

「うれしい。キスして。」

FUKI は凜子を抱きしめキスをする。凜子はそれにこたえるようにゆっくりと FUKI の唇を開いていく。

耐えきれない、もう我慢できない……。凜子を抱き上げ寝室へ。

いつの間にか凜子が FUKI に覆いかぶさる。

重なり合った唇が風輝の首筋へ……。完全凜子の主導だ。

気が遠くなりそうなのを振り払い、凜子に跨り唇を捉える。

風輝の長い指が凜子の肌を滑らかになぞる。ピアニストの指は強弱自在、快感の波が押し寄せる。

俺の隣に凜さんがいる。

風輝は凜子を思いきり抱き寄せる。

幸せだ、夢のようだ。

凜子さんと心身ともに結ばれるなんて、本当に諦めなくてよかった……。一生離さない。

6か月後、いよいよ RON のプロジェクトもクライマックスを迎える。

上海浦東国際空港のエントランス奥に大型デジタルサイネージが設置された。

空港の発着便表示、上海の高層ビルではおなじみの広告手法だが、

「Airy Feeling～ 逢いたくて」は触る、聴く、視る、を等身大で感じることができる。

「出逢い」 「逢いたくて」 「再会」

300×300 cmサイズ 全面に Airy の絵

「出逢い」は等身大の男性と女性の後姿……。絵に魅入られている。

「逢いたくて」は男女が向かい合う

そして「再会」は手を握り合う
3 パターンのビジュアルが完成した。

ビジュアルの男女に生身の人間が重なることでRON のエアリーを感じることができる。
画面に触れると、A-LIVE 演奏の「愛の夢」が流れる。
エントランスから正面に「逢いたくて」
左に「出逢い」
右に「再会」
連日人だかりで撮影待ちの列ができる撮影スポット、SNS に膨大な Airy の写真がアップされている。
RON の独壇場だ。

WEB マガジンの BELLISSIMO のサイトには、創作する RON、演奏する A-LIVE、撮影する RUI のメイキング動画がアップされ相当数のフォロワーのコメントが拡散。
各航空会社や旅行会社が入る高層ビルの大型スクリーンに流れるメイキング動画は注目の的だ。
交通広告として空港に向かう主要路線にポスターが貼られるが次々剥がされる人気ぶりだ。

最高のアーティストが集結した夢のコラボレーションを実現した制作チームは、年間広告大賞にノミネートされる。

「絵画展や写真集の PR のはずが随分と派手なプロモーションになったね。奏子と凜子にかかるとうなるのは納得だな。予算が厳しい日本向きではない。」

「予算も膨大ながら反響も見返りも相当でしょ、翔。採算は問題ないはず。」

「いい投資案件だったね。まさにそれぞれの才能に投資した甲斐はある。凜子をリーダーに PR 部門を拡張するから奏子も参加すればいい。」

「翔さんの会社なら願ってもないです。アジア全域で仕事できるしね。」

仕事や仲間、環境に恵まれて、ずっとこのまま風輝といられたらいいな。

積年の想いを叶える～愛の告白

SIPO(SHO International Promotion Office)は、凜子を中心にアジアの新進芸術家のプロモーションを世界に発信する。

RON 同様にセンス（感性）を刺激するストーリー仕立てが、若い世代から称賛される。

スタッフも多国籍軍でカルチャー発信に最高の職場だ。

そして凜子は風輝と暮らしている。

ライブ会場で、レストランやマルシェ、映画館とあらゆる場所で二人は被写体になり、SNS で騒がれるが、ノーマコメントを通しやり過ごす。

凜子の素顔は晒されず身元不詳、ただ「上海在住の外国人で日系企業に勤務」と記載され、毎回二人のファッションがニュースに・・・BELLISSIMO ではファッションISTAに分類されている。

「サングラスやジュエリーも注目されているって。批判されるよりいいね。」

「凜子さんはかっこいいからね。K.Zhang も 2 連のオーダーが多いって。但し RIN&FUKI モデルは作らないらしい。」

「これは世界に二人だけのデザインよ。彼女に感謝ね。」

風輝が運転するモデナがウオーターフロント地区に入った。K.Zhang のアトリエだ。

「プロポーズするからリングをオーダーしたい。」

「いよいよね。最旬のアーティストが誰かのものになるなんてちょっと残念。」

「ずっとイエローダイヤのリングをしているんだ。それをはずしたい。」

「ふーん、意味深ね。たしかプリンセスカットだったような・・・なんかで見た気がする。元カレの？」

「うーんわからない。」

「オーバルカットのダイヤでいこう。私的なイメージでいうと彼女は完璧なオーバルがはまるね。」

「超一流デザイナーに任せるよ。」

「凜子、シンガポールからの依頼があるんだけど、行く？それとも LOVELOVE 優先？」

「もうこっちはオトナよ、彼も超多忙だし。シンガポールかあ、ボードレスがいいよね。」

「凜子の好きな国よね、週末に出発します。」

ここ上海はどこに住んでも膨大なメニューからテイクアウトが楽しめるが、今日は風輝のために、サワダさんの鮨店に長崎から届いた食材で夕飯を作る。

白身魚が絶品の長崎ならではの蒲鉾

いせ海老の刺身（澤田さんが調理済み）

あらの切り身で鍋に。（野菜も調理済み）

メの五島うどん

凜子の大好物、長崎の角煮まん

翠月楼の杏仁豆腐がデザートだ！

凜子一推しの焙煎、「プレミアムショコラ」

お酒は長崎産の麦焼酎・・・清流の如しで透き通る味とサワダさん推しだ。

全て下ごしらえからカットまでしてあるので、凜子は並べるだけ。

調理器具やカセットコンロも一揃い用意されていた。

食器は翔の見立てで藍色の柄がユニークな波佐見焼が各種様々見繕ってある。さすがだ。

大好きなカサブランカとラナンキュラスを生ける。

食器を洗って食材を盛り付ける。

「今日は何時に帰宅？」

「迎えに行くよ。」

「大丈夫。夕飯用意するね。」

「18時に帰る♡」

「了解。」

凜子さんって奏子の話だと料理が得意らしい。

以前、東京都内でイタリアンやフレンチを習っていたとか・・・。楽しみだ。

ワインは確かシチリア産が好みだったな、シャンパンはモエのピンクで。

エノテカショップに寄ってから帰宅だ。

玄関に入ってキッチンを覗くと、皿に盛り付ける凜子が・・・

風輝はこっそり近寄り、凜子の後姿を抱きしめる。

「おかえり。」

「ただいま。豪勢だね。」

「長崎流よ。風輝と食べたくなって。手を洗ってきて。」

風輝は凜子の首筋にキス・・・そして振り向きざまに唇を奪う・・・凜子が応える。

幸せだ。

「シャンパングラスとワイングラスを並べて。絶対を買ってくると思ってた。今日はラリックがいい。」

長崎流ディナーを堪能する。

「なんかみんな用意されて並べただけって感じだった。」

「美味しかったよ。ご馳走様。」

「来週末から1週間ほどシンガポールに入る、奏子と仕事で。」

「俺はその頃仲間とNY、2週間程で戻る。」

風輝にプレゼントがある。

凜子はオレンジ色のギフトボックスを取り出す。エルメスだ。

風輝がボックスを開けると、マホガニーとオレンジレザーのフォトフレームが・・・

「このフレームは「プレイヤード」っていうの。デスクに飾ってもいいし、出張のお供にもいいでしょ。お気に入り写真を入れてね。もちろんお揃いよ。」

フォトフレームを贈るのも珍しいが、エルメスオレンジが凜子らしい。何をしても素敵なお女性だ。

風輝は凜子を抱き寄せる。そして凜子の耳元で囁いた。

「したい・・・。」

凜子の熱量が上がる。

「マネージャー、YUKI いる？いま台北かな。FUKI です。」

「2日前から出張。シンガポールエアラインがキックオフらしい。」

「へえ。どこに？」

「シンガポール。そっち(上海)にランチがある会社らしいよ。アジアンミックスとか・・・。」

「え!!! だれと会うかわかる？」

「調べて連絡する。」

まさか凜子さんのチームじゃないよな。

奏子に連絡するが繋がらない。

「凜子、今回はシンガポールエアラインのプロモーション。CM制作チームも合流するって。」

「こっちはなんで絡むの？」

「上海とシンガポール便の囲い込み・・・特にマダム世代へアピールしたいって。浦東空港のプロモーションが大いに気に入られたみたい。」

「あれは絵画と音楽と写真の融合だけど、今回はなんで行くのかな。」

「ボディラッピング、デジタルサイネージ、コマーシャルと統一したビジュアルでいきたいとか。」

「ふーん。じゃあビジュアルは写真かなあ。」

人種のミックス感がパワフルなシンガポールへ入国。

CBD (セントラル・ビジネス・ディストリア) にあるオフィスで打合せ。

今日は初の顔合わせだ。

凜子はディオール真っ白ブラウスにブラックスリム、サンダル。

ジュエリーは FUKI のブレスレットとピアス。

奏子はバレンシアガの真っ赤なブラウスにホワイトスリム、オープントウのパンプス。

スタッフに案内されミーティングルームへ。

「あっ!!!」

視線が合った先にある顔は・・・昔の恋人だった。

トレードマークの真っ白いブラウスに輝く笑顔。

「凜子、奏子も？」

「YUKI さん、お久しぶりです。制作クルーって YUKI さんのチームだったんですね。」

「上海ランチの多国籍チームって二人だったんだ。」

「SIPO は翔の会社です。」

いちばん逢いたかった最愛の女性が目の前にいる。10年ぶりか、磨かれてさらにかっこよくなった。10年!?まさか YUKI に遭うなんて・・・いまさら罰ゲーム？

肌の色が様々交じり合う多国籍な顔ぶれだ。

いろいろとアイディアを出し合ってこの日は歓迎会となった。

YUKI のチームメイトは顔馴染みだ。自然と凜子は YUKI の隣に座る。

「久しぶり、凜子。逢えてうれしい。」

「お久しぶりです。10年ぶりですね。」

「なんで上海に？」

「日本が疲れたので、リフレッシュの旅に出たらいつの間にか上海に逗留することに。兄の会社があるので今、奏子と組んでいます。」

「仕事も恋愛も留まる大きな理由よね、凜子。」

「まあね。」

「公私ともに充実している様だ。」

「おかげさまで。YUKI さんもお活躍の様子で何よりです。」

「また一緒に仕事ができるうれしいよ。」

再会に感動しているのは俺だけか・・・10年待ったんだから焦ることはない。じっくりと進めるつもりだ。

いまさら驚くこともなくあっさりと YUKI に対峙する自分が不思議だ。もっと揺らぐと思ったのに。それより風輝に逢いたいな。

「上海国際空港のプロモーションは見事でした。絵画と動画、ポスターと音楽の融合は新鮮で、ぜひ今回も市場の感性を刺激したい。」

「中国流に言うと天の時、地の利、そして人の和・・・たまたま偶然に入った上海で、音楽家や芸術家、写真家と知り合い、上海国際空港という注目度の高いクライアントと SNS はじめ大人気の WEB マガジン BELLISSIMO とのコラボレーションが成功へと導きました。このプロジェクトもそう願います。」

「上海とシンガポールの路線拡大、多国籍なスタッフ、様々な形態の広告が可能なこの地なら、成功につながるでしょう。3日間で方向性を決めて半年後には市場を独占しましょう。」

どうかこの仕事をきっかけに凜子とまたやり直したい。

「奏子、ここ最近の凜子はどう？」

「YUKI さん、いまの凜子は ON/OFF と最高に充実しているから心の隙がまるで無い、難しいですよ。」

「シンガポールへのチケット取って欲しい。至急で。」

「どしたの？」

「ホテルは SIPO に聞いて凜子さんたちと同じで。」

「2日後の朝便、午後には向こうに到着だよ。NY とは時差があるから。」

よりによっていまさら YUKI と仕事するなんて、絶対にいやだ！
不安と恐れと嫉妬で狂いそうだ。

3 日間の MTG を終わったら 2 日後に上海、1 週間程の出張になる。

テーマは「Borderless ボーダレス 自由に生きる」

それをどう表現するかは上海に戻ってからだ。

「凜子はどう？」

「まだ鮮明ではないけど、様々な肌を色で表現したい。各色の人のシルエットが重なり合って混じり合うビジュアル・・・RON に描いてもらおうかな。動画は本物のヒトでいきたい。YUKI さんはどう？」

「YUKI さんなんて他人行儀だな。」

「だいぶ経ったから・・・。ビジュアルイメージ湧くでしょう。」

MTG 最終日 17 時に FUKI から着信。

「RINKO さん、あと 30 分でそっちに迎えに行くから。エントランスでね。」

あら、どうしてシンガポールに？

「奏子、風輝がこっちにいるって。お迎えだから先に失礼します。」

ふーん、聞きつけて不安から慌ててこっちにねえ。さすがの風輝も YUKI となれば焦るよ。

エントランスを出るとブラックのポルシェの前にかっこいい風輝が・・・

こちらでも知られているのか、シャッター音が凄い。

凜子が躊躇していると、風輝が駆け寄り思いきり抱き締めた。

「RINKO さん、逢いたくてきちゃったよ。」

YUKI はエレベーターで階下に向かう凜子を見つけて急いで追いかける。

エントランスを出ると、抱きしめられている RINKO の姿が・・・

オトコは誰なんだ！！驚きと怒りがこみあげる。

あまりにも美しいハグにさらにフラッシュが。

FUKI だ！なんで凜子とここに。なんで抱き合っているんだ。

FUKI は凜子の肩を抱きながら隠すようにクルマに乗せて走り去る。

YUKI はただ茫然とする。

YUKI は FUKI のマネージャーに連絡する。

「NY の仕事を早めに切り上げて一人だけシンガポール経由で。恋人に会って一緒に帰国するように手配しました。」

「恋人？？？RINKO が？？？」

「はい。こちらでは話題のカップルですよ。」

初めて知った顔をしたが、一緒に仕事をするために奏子に狙いをつけて周到に準備したつもりが、凜子が上海にいて FUKI の彼女なんて・・・。

FUKI は超人気のピアニストでゴシップもそれなりだ。年上の凜子が耐えられるとは思えない。長くは続かないだろう・・・・・・・・・・そう自身に言い聞かせる。

国全体がウオーターフロントといわれるシンガポールは海に囲まれたビーチリゾート。

FUKI のポルシェはシンガポールの街を抜けて海辺のリゾートへ。

森林のなかに 1 棟ずつ点在するコンドミニウムは、目の前にプライベートビーチが広がる。

「帰国までゆっくりしよう。奏子はショッピングにディズニーランドを楽しむそうだ。」

「彼女はこっちに友達が多いからね。あたしは風輝とここでゆっくり過ごしたい。でもどうして急に？」

「NY から戻るのに立ち寄った。逢いたかったから・・・・・・・・。」

「そう、YUKI さんに 10 年ぶり位に会った。プロジェクトチームが一緒にびっくり。」

「・・・・・・・・。ときめいた？」

「全然ときめかない。だいぶ前に終わったことだし忘れてる。もしかして嫉妬してる？」

「カラダが燃えるくらい・・・・・・・・。」

「風輝らしくない。わたしはいま幸せよ。」

別れた理由も鮮明でないし、恋人だった実感はない。やりがいのある仕事を協業したという記憶のみがある。

凜子は風輝との甘い時間を存分に満喫した。

マリンスポーツを楽しみ、夜は専属シェフによる無国籍料理とワインを堪能。

バーテンダーによるカクテルでほろ酔い気分。

そして二人だけの熱い夜を過ごした。

まだまだ凜子さんに翻弄される・・・・・・・・。

包み込まれる温かさに酔いしれながら、溺れないように必死だ。

風輝の指遣いは魔法だ。強弱をつけながらリズムカルに這う愛撫に気を失いかける。

これからずっと風輝に抱かれていたい。

「明日は上海だね。」

窓の外にいくつものキャンドルが灯される。

ビーチには大きな花火が揚がる。

「きれい・・・・・・・・。海面には花火と星空が映ってる。まるでギャラクシー。」

風輝は凜子の正面に跪く。

そして凜子に向けて箱を開けるとそこにはひときわ輝くリングがあった。

「Will you marry me?」

花火が映りこんだその石を見つめた。きれい・・・・・・・・

「me???

「you are the only one」

そうやって凜子の指にリングをはめた。

美しいオーバルカットの石でリング部分にもダイヤがはめ込まれている。

「もうイエローダイヤはいらない。」

「気になってたの？かわいい。」

ダイヤをはめたその手で風輝の首に手を回し、つま先立ちでキスをする。

「愛してる。」

「一生、すべてをかけて凛子さんに尽くすから。」

風輝の10年想い続けた恋が成就、とうとう凛子を手に入れた。

プロポーズ・・・この感じ前にもあったような気がする。

そうだったら今ここにいるわけないよね。

大きい楕円形のダイヤって見たことない。本当に素敵。

なにか風輝にサプライズを贈りたい。

あなたしか愛せない ～ 奇跡の命

「MASA さん、お願いがあるんだけど。」

「RINKO さん？何でも言って。」

「ピアノを教えて欲しい。」

「FUKI がいるじゃない。」

「サプライズでメンバーとラブソディ・イン・ブルーを FUKI に贈りたい。」

「すごい！カッコいい。スタジオに来て。もちろん内緒でね。メンバーと相談しよう。」

それから毎日仕事帰りにピアノを習いにスタジオへ通う。

「凜子さん、かなり上級者だけどやってたでしょ。」

「うん、サクソスとなら合わせられる。」

「じゃあ、ジャズっぽくサクソス、チェロ、ヴァイオリン、トランペットで演奏しよう。どこで披露するの？」

「FUKI の自宅で。実は彼、来月誕生日なんだ。パーティの支度はチャイニーズと日本食、イタリアンのシェフが来てくれる。招待するメンバーはお任せします。一応プライベートなので。」

「了解。仕事仲間でも凜子さんと共通の友人のみってことで人数は 30 名以内と店に伝えてね。」

久しぶりのレッスンは難度が高いうえに合わせるのが大変。

なんとかサプライズデイを迎えることができた。

FUKI は別のスタジオで練習。18 時に帰宅予定。

招待客は 17 時半

移動レストランは 15 時

飾り付けや照明など設営は 12 時から

凜子は午前中に練習、午後からはパーティの準備だ。

もちろんベッドルームも二人専用の飾り付けをする。

「凜子、手伝うよ。」

「奏子、ありがとう。朝早くクリーニングも入ったし、それぞれがやってくれるのであまりやることない。」

「さすが風輝のバースデーね。もしかしてその指輪は・・・プロポーズされた？」

「うん。なんかうれしかったけど既視感がある・・・記憶錯誤ってやつかしら。」

もしかして秋月さんのプロポーズが甦ったのかしら・・・

「仕事でいろんな広告や編集しているからじゃない？ほらジュエリーの広告もさんざんやったし、小説にも出てくるし。」

「そうだね。」

17 時になると来客が送迎車から降りてくる。カジュアルな雰囲気だ。

音楽業界、制作関係、編集者など限られた人選で、サプライズとわかっている。

18 時半、FUKI のアルファードが入ってきた。

門をくぐると同時に設置された舞台にスポットが当たる。

メンバーがバースデーソングを奏でる。

「うわーなにこれ、知らなかった。すごいサプライズ！」

おめでとうの声が一斉にかかる。

舞台はいったん光が落ちて、またスポットが当たる。

ラブソディ・イン・ブルーのイントロでサククスが入る。

ピアノにスポットが当たると凜子の姿がある。

ピアノ弾けたんだ。それもかなりの腕前だ。

メンバーそれぞれの楽器が美しく響く。

風輝は凜子の演奏に目が釘付けだ。

「凜子はこの日のために1カ月みっちり仕事帰りにレッスンしたんだから。感激でしょ。」

最後はオクターブの和音で指がちぎれそうになりながら必死で弾く凜子。

かなり練習したのがわかる。

この演奏はMASAが師匠だな。

拍手喝采だった。

ピアニストのFUKIにピアノ演奏を贈るなんて凜子しかできない。

FUKIは舞台に駆け寄り凜子を後ろから思いきり抱き締めた。

「お誕生日おめでとう。」

「凜子、愛してる。ほんとにうれしい贈り物だよ。」

一斉に照明がついて、調理される。香りに音に彩り豊かな食材とシズル感満載だ。

招待客は美味に会話に音楽を楽しむ。

誕生日プレゼントが積み上げられている。

「あなたがFUKIの愛しい人ね。おかげさまでわたしのデザインも話題沸騰。K.Zhangよ、これからもよろしくね。オーバルダイヤ似合っている。」

「素敵なデザインでほんとううれしい。今度アトリエに行きます。」

宴もたけなわ・・・最後は音楽仲間によるショパン「別れの曲」アレンジで幕を閉じた。

MASAさんのサククスと合わせているとき、なぜか懐かしかった。誰かとサククスで合奏したのかな。

ラブソディ・イン・ブルーは昔から大好きな曲で、友達と演奏していた。

頭が痛い。

凜子は頭を抱えて座り込んだ。

「凜子、どうした？」

「奏子、頭が割れそう。誰かとサククスと合奏した気がする・・・急に思い出した。知ってる？」

「いろんなメンバーと演奏していたよ。サククスもヴァイオリンも。凜子はピアノでね。」

「そうか。じゃあこの頭痛はカクテルの飲み過ぎかな。」

「少し横になった方がいいよ。あとは任せて。」

「お願い。」

凜子は自室のソファに横になった。すーっと気を失った。

「風輝、凜子は頭痛で自室に入って休んでる。みんなを送り出したらお願いね。」

「なんで??？」

「頑張ったから疲れたのかも。素敵なパーティだったでしょ。サプライズも最高だったし。」
(プロポーズやサクスの演奏で記憶の扉がノックされた……なんて言えない。)

YUKI が上海の SIPO に空港から向かう。

「奏子、いまそっちに向かっている。終日社内と聞いている。」

「あらまた突然ね。凜子はまだ戻らないけど。」

「食事に行こう。凜子も誘って。」

「了解。お鮎に行こうか。」

FUKI はツアーで本土を回っている最中だ。

そして凜子は会社所有のコンドミニウムに滞在している。じっくり話せるチャンスかもしれない。

RIN&FUKI に音声着信

「凜子さん、今日は広州、あと少しで会えるよ。もう限界。」

「仕事がなければ行ってあげられるけど。」

「大丈夫。会えない分も覚悟してね。死ぬほど愛してあげる。」

「はい、はい。さっき奏子から連絡があって YUKI さんが来ているって。」

「え????会うの????」

「うん、みんなで食事に行くよ。」

「……。いやだ!絶対に会わないで。」

「どうしたの?絶対的彼氏が何を言うのかしらね。カラダに気を付けて乗り切ってね。」

なんで YUKI が……。凜さんとやり直そうとしているのか。

不安と怒りと嫉妬で血が逆流しそうだ。

「上海にこんなに美味しい鮎があるとは……。さすが日本のすし職人は最高だ。」

「食通の YUKI さんも脱帽でしょ。凜子の兄貴の経営よ。」

「翠月楼のオーナーで SIPO の CEO だよ。」

「事業家なのよ。会ったでしょ、長崎で。」

「凜子はコンドミニウムだろう。送っていくよ。」

「ありがとう。」

相変わらず強引なんだから。先にタクシー呼んでおけばよかったなあ。

YUKI はコンドミニウムのゲートにタクシーを待たせて、凜子と敷地内を歩きだす。

「ここまでで十分よ。敷地内はセキュリティが嚴重だから。」

YUKI は立ち止まって凜子に向かい合う。

「RINKO、やり直そう。あの時のアクシデントはすでに解決済み。本当に申し訳なかったと後悔している。どうかお願いだ、チャンスが欲しい。」

「え??? また恋人関係に戻るってこと?」

「できればそう願いたい。」

「わたしには恋人がいて結婚の約束をしたの。あの時は傷ついたけどもう10年前の過去でしかない。」

「まさか FUKI が????」

「うん、そう FUKI がわたしの恋人。」

「年齢差もあるし俺から見たらまだ青臭い。ゴシップも多いだろう。耐えられるか?」

「いろいろ考えるより今を大切にしたいから…。それに愛されて本当に幸せなの。だから YUKI さんとはあり得ない。あなたの従弟なんだから祝福して欲しい。」

「……………。無理だ。」

「とっても好きだったから、あなたとのことはかなり深く傷つき砕け散ってしまったの、跡形もなく。だからもう再燃することはない。」

「よりによってなんで FUKI なんだ。それこそありえない。」

「送ってくれてありがとう。仕事仲間として YUKI さんを尊敬している。今回の案件、成功させようね。」

凜子はくると背を向け中庭の奥へと去っていった。

YUKI はしばらく呆然と立っているしかなかった。RINKO にそこまで愛されている FUKI が無性に腹ただしかった。

RIN&FUKI に送信する。

「YUKI さんに FUKI と将来の約束を交わしたと伝えました。そしてとっても愛していることも。FUKI に思いきり抱き締めて欲しい。待っています。RINKO」

「すごく不安だった。俺は凜子さんに愛されているんだね。」

いよいよシンガポールエアライン上海路線拡大のプロモーションが始まる。

メインビジュアルは RON 画伯の作品「BORDERLESS～自由を生きる」

白色をベースにピンク、イエロー、オークル、ブラウン、モカ、グレー、ブラック各色をスキンカラーにヒトの横顔を重ねる。

それが混じり合って滑走路に虹のように流れる。

なんとも幻想的なビジュアルだ。

動画はそれぞれのスキンカラーで全身メイクした大勢のモデルが、キャットウォークで滑走路をランウェイする。

ポスター、動画共に撮影は YUKI のチームだ。

テーマ曲はベートーベンの「運命」をヒップホップにアレンジ。

編曲、演奏は A-LIVE だ。

荘厳な曲がかっこいいリズムで現代曲にアレンジされ、若者に大人気。クラブでは連日流され盛況だ。

さすが FUKI。ビジュアルに最上かつ新鮮な旋律を創り上げる。YUKI は益々飛躍する FUKI に嫉妬さえ覚える。

「FUKI、まさかベートーベンをアレンジするとはね、さすがだ。」

「YUKI や RON の感性を生かすには荘厳でいてクールでないと感動させられないからね。」

「ここ 1 年の成長は目を見張る。RINKO のおかげか。」

「もちろん、彼女の隣に並ぶためにはもっともっと成長しないとね。RINKO さんは俺の埋もれている感性を引き出してくれるし、一緒にいるだけで刺激的なんだ。」

「それについては経験済みだ。」

「YUKI はすでに手放したんだから諦めてね。RINKO さんを一生離さない。10 年想い続けたから。」

SNS、デジタル広告、WEB マガジン各配信によって市場の感性を十分刺激するビジュアルへと完成された。もちろん撮影スポットとしてシンガポールの空港や交通機関は人だかり、SNS に映える写真が次々とアップされ、絶賛のコメントで埋まる。

大成功だ！

奏子がキャストやチーム編成のプロデューサー、凜子がクリエイティブディレクター。この 2 本柱で個性の強い斬新なビジュアルを活かしたプロモーションが生まれる。

それは最上級のクリエイターやアーティストが、彼女たちの元に集結することで成功に導いている。

最上級のクリエイターを発掘し最大限に活かす凜子の手腕は見事だ。

凜子と風輝は順調に愛を育んでいる。

創作は自宅の作業がほとんどで、ライブは上海中心が多い。

ツアーになれば 1 カ月～2 カ月は留守にするが、いまはもっぱら創作だ。

凜子は SIPO に入社。いまはバンコクの案件に入っている。

アジアは素晴らしいアーティストが多く、発掘して世に出すのが愉快でたまらない。

夕食は自宅で風輝と調理する。風輝のイタリアンはプロ並みの腕だ。

そしていつのまにか風輝の寝室が主寝室になり、二人のスイートルームだ。

「翔、凜子は仕事のし過ぎでは？弱ってくると心配だ。」

「蒼、少し休ませようと思っている。この頃既視感があるって。それに事故の夢を見るとも。仕事をこなしていれば記憶が戻る可能性は薄いけど、疲れがたまると悪夢を見ると奏子に聞いた。」

「それはよくないな。一度日本に戻してくれ。彼も連れてくるといい。」

「わかった。彼にプロポーズされたいらしい。事故に遭って記憶が喪失していることは話してある。」

「緊急に記憶を取り戻さなければいけない理由は全くない。戻らない方が凜子には都合がいいのだから、心理的療法や薬物治療は必要ないと考えている。」

「家族全員がそう思っている。」

「翔、ちょっと疲れた。長崎に一度戻る。不眠が続くし安定剤も処方して欲しいし……。」

「検査もかねて療養するといいよ。かなり仕事がハードだし、万全ではないのだから。」

「風輝と相談する。」

この頃、疲労からなのか凜子さんの不眠がひどくなってきている。

診察を兼ねて一度長崎に戻さないと……。

「凜子さん、来月から2か月間NYに入る。2、3カ月程長崎に診察を兼ねて戻るのは？しばらく離れていたからご両親も心配しているよ。」

「うん、そうさせてもらう。不調が続くからいったん帰国して受診する。」

奏子にSIPOを任せて凜子は帰国する。渡航時間が短く時差が少ないのはアジアの利点だ。

到着ゲートに翔が出迎える。

「荷物は後程届けさせるのでこちらへ。」

社用車のメルセデスワゴン、運転手がドアを開ける。

手前で凜子がしゃがみ込む。

「凜子、大丈夫か？」

「貧血みたい。」

翔に抱きかかえられ後部座席に乗った。

「蒼の病院へ直行してくれ。」

気を失ったまま病院に運び込まれた凜子は丸一日眠っていた。

「明日目を覚ましたら、ゆっくり検査するつもり。相当疲れている様だ。いまは薬で眠っている。」

「一度帰宅する。」

「病院にいれば安心だ。俺がいるから大丈夫。父さんと母さんに心配ないと伝えてくれ。」

「蒼、凜子をよろしくな。」

翌日、検温、血圧測定、採血に尿検査を済ませる。

「院長、凜子さんは微熱に低血圧、低血糖。それに……。」

「なんだ。」

「尿検査なので確定できませんが妊娠しています。問診では11週程かと。」

「え！！！！高齢妊娠だな。」

「CTやMRIのまえにエコー診断が必要です。」

「すぐに婦人科の塔子先生を。」

「凜子は事故の際に記憶と共に婚約者と2カ月ほどの胎児を失くしている。まさかこの年齢で再び妊娠するとは予想外だ。胎児の状態は？」

「エコーで見る限り母子ともに特に問題はありません。高齢出産になるので、流産はもちろん早産にも最大限の注意が必須です。幸い帰国したので実家で静養しながら受診できます。噂に聞きましたが、お相手は有名なピアニストの FUKI とか。」

「有名なのか、日本でも。結婚の約束をしているらしい。」

「超人気です。まさか凜子さんがお相手とは。すごい。」

「母胎に悪影響のないように検査を頼む。」

「蒼、気持ち悪い。胃が悪いのかな。」

「しばらく検査入院だ。」

「うん。」

「凜子、実は妊娠 11 週と診断された。気持ち悪いのは悪阻だ。」

「え??????妊娠????この歳でありえない。もともとここ数年生理不順だったし。」

「ありえるだろう。相手はピアニストの彼じゃないのか？」

「風輝しかありえないけど、もう 40 代なのに妊娠なんて。無事に生まれるか自信ない。どうしよう。」

「胎児に問題がなければ万全を期して出産までもっていく。それとも産まないのか？」

「うれしいけど、母親になれるかなあ。」

「まずは 15 週で羊水検査だ。異常があれば諦めてくれ。凜子が一番大切だから危険は冒せない。」

「うん。」

「検査がひと通り終わる前は相手に妊娠を報せるな。」

「わかった。」

風輝は 2 カ月程 NY だし、検査結果が良ければ真っ先に報せる。出産が難しければ諦めよう。

「凜子が妊娠?????まじか!!!!40 過ぎて、数年前に流産も経験しているのに！」

「そうだ。検査結果によって相手に報せるか決める。」

「無事に生まれるのか？」

「まだわからない。どっちにしろ、こっちにずっといる。安定期まで誰にも言うな。気になるのは妊娠によって記憶が戻ることだ。」

「相手は NY だ。戻り次第こっちに來てもらう。そうすれば過去に戻ることはないだろう。」

「奏子、いま妊娠 11 週目だって、どうしよう。」

「え!!!おめでとう。しかしその歳でよく妊娠したね。相手が若いからかな。」

「うん。まだ予断は許さないし検査もするので誰にも言わないで。もちろん風輝にも。」

「かわいそう、父親でしょ。」

「蒼が羊水検査の結果次第だっていうから。15 週目にやるらしい。怖いな、お腹に針を刺すとか・・・。1 週間ほどで結果が出るらしい。」

「確か麻酔もあるから痛くないって聞いたよ。」

「うん。塗る麻酔とか聞いたけど。」

「スーパースター FUKI の子供かあ。世間に知れたら大騒ぎだね。すごく喜ぶよ、彼は。」

「だといいけどね。」

婦人科の女性医師によって羊水検査をはじめ可能な限りの検査を受けた。
悪阻もひどく、大事を取って入院。風輝にも言えず不安な1週間を過ごす。
睡眠導入剤が処方され、夢を見ることもなくぐっすりと眠れた。

「凜子、検査結果は何一つ問題がない。奇跡と言いたいくらいだ。あとは高齢出産ということで、流産と早産に気を付けることだ。退院したら毎日医師と看護師を訪問させる。彼に連絡するといい。」

帰国から6週間後、凜子は退院して実家に戻る。

「FUKI、NYからいつ戻るの？」

「1週間後には終わるよ。日本はどう？」

「昨日まで入院してた。」

「え????どこか悪いの？」

「あのね、妊娠16週目に入ったの。」

「妊娠????俺との赤ちゃんができたの？」

「そう。無事に育っているって。高齢出産だから蒼が完ぺきな医療体制でフォローしてくれている。

悪阻もやっと治まってきたの。だから上海にはいかれない。」

「夢のようだ。凜子さん本当にうれしいよ。幸せだ、ありがとう。こっちから直接長崎に向かいます。顔が見たい。」

「便が決まったら連絡ちょうだいね。迎えを用意するから。」

「マネージャー、RINKOさんに赤ちゃんができた。NYから日本に入る。出産まで日本に滞在するから仕事を詰め込まないで欲しい。」

「この時代だから環境さえ整備すれば、離れていても創作活動に支障はない。いくつかのライブはこなして欲しいけどツアーは入れない。FUKIの産休だね。」

「FUKI、おめでとう。RINKOさんへの10年越しの想いが叶った上に家族ができるなんて。自分のことのようにうれしいよ。RINKOさんの傍にいてあげてよ。」

「ありがとう。素晴らしい仲間がいて俺は幸せだ。」

「翔さん、こっちから長崎に向かいます。出産まで日本に滞在したいと考えているけどどうかな。」

「うちの別棟に凜子と滞在したらいい。必要な機材は揃えるし、練習室も用意する。グランドピアノはあるし、防音仕様だから創作も可能だ。新たにスタジオを建てるのもいい。パソコン類は確かMACだったかな。足りない物はこちらで揃える。産後もこちらに住むことになるから、敷地内に新しい住居を用意する。」

「実は俺カナダ国籍なんです。日本の滞在許可は取れますか？」

「問題ない。凜子の国籍は日本だし、わたしの方で何とかするのでゆっくり家族で住んで欲しい。日本、上海、NY、シンガポール、台湾と世界を渡るFUKIなら問題ないのでは？高齢出産の凜子に無理はさせたくないし、育児はなおさらだ。実家にいれば何も問題ないからね。」

「RINKO さん最優先で考えますのでご安心を。創作は日本で、それに俺は産休です。そのあとのことはまた二人で相談します。」

NYでの活動を最後に無期限の休養を発表した風輝に世間は驚いた。
病気か、ケガか、メンバーの不和か・・・様々な憶測を呼ぶ。
事務所の発表は「充電期間」のみ、まさか産休で凜子のいる長崎へ向かったとはだれも予想しない。

風輝は最高の幸せを掴んだ。まるで夢のようだ。
想い続けた佳人と結ばれ、新しい命に恵まれた。
そしてみんなに祝福されている。
胸にはマリッジリングが・・・。

長崎の実家は、凜子たちの住まいに、メンバーが宿泊できるスタジオが着々と進められている。
凜子は6カ月を過ぎてお腹の膨らみが目立ってきた。
毎日訪問する医療スタッフと住み込みの看護師によって万全の態勢、順調だ。
風輝が一緒にいることで凜子の出産への不安が和らいでいる。

「FUKIの作る曲は、まるで曲線を描くように柔らかく、癒される表現へと変わってきたと思う。」
「愛する人と新しい家族ができたからかな。」

新しくできたスタジオにメンバーが集結。
数日前から楽器の調律や音響担当が入ってスタジオの環境整備。
2週間、練習を重ね、のちにレコーディング。
専用サイトに動画をアップ。
「敷地内に新居とスタジオができるなんて、RINKOさんちって半端ないよね。」
「音響に優れたスタジオだし、ゆっくり合宿できるなんて最高。」
ショパン、ブラームス、モーツァルトによる子守歌をFUKIが編曲、メドレーに仕上げる
A- LIVEのピアノ、ヴァイオリン、チェロ、サックスでクラシックから現代楽曲に進化。
あつという間に老若男女問わずダウンロード、ドラマの主題歌に採用されることが決まった。

「凜子さんのおかげで創作意欲が益々湧いてくる。妊娠を知ってから激しい曲調からやさしく温かい音が欲しくなってきた。ショパンやモーツァルト、バーンスタイン、ガーシュインなんか気になるな。」
「胎教にもいいみたい。」
風輝は凜子のお腹をやさしく撫でる。
「ゆっくり慌てず出しておいで。いまは俺の音楽をたっぷり聴いて成長してね。」

メンバーはヨットクルーズ、フィッシングが満喫できるハウステンボスの別荘がお気に入りだ。
ここは海外のプロアスリートがOFFに療養を兼ねて滞在する別荘地として、とんでもないコミュニティが形

成されている。もちろん A-LIVE も即仲間入り。

翠月楼所有の2棟は、創作や休養の長期滞在にスタッフは大忙しだ。

「A-LIVE や上海メンバーは長崎 LOVER だね。」

RUI が A-LIVE 撮影のために訪日、長崎に入った。

「Lullaby（子守歌）シリーズのジャケットと写真集の撮影に来たよ。RINKO 体調は？」

「日本までありがとう。フィッシングもでしょ。」

「長崎は最高だってみんなから写真は次々送信されるし、奏子と RON も来ちゃった。」

「遊びも食も宿泊もそして送迎もお任せください。」

「RINKO の家ってすごいんだってね。」

「古いだけよ、それに翔のおかげかな。」

「漆黒の FUKI に光り輝く RINKO さんは BLACK & WHITE なんだ。それぞれが照らし合ってさらに輝きを増す感じかな。互いの面が重なり合って新しい世界を創り出す。

そんな二人を対のビジュアルで表現してみた。是非受け取って欲しい。」

RON は 30 cm 四方の額に入った抽象画を2枚、凜子と風輝それぞれに贈る。

FUKI RINKO と隠し文字が描かれている。

「RON、すごくクールだよ。ジャケットのビジュアルにぴったりだ。」

「今回のジャケットは RUI に譲るよ。気合入ってたからね。」

「FUKI、マリッジリングあるんでしょ。K.Zhang に聞いたよ。」

「うん。まだここにある。」

「Lullaby のメインはマリッジリングをはめた二人の手を重ね合わせたビジュアルでいきたい。」

「SNS が炎上しそうだな。」

「かえっていいかもよ。だって長期休暇だし、そろそろ親になるんだし匂わせにいいよ。」

「任せるよ。」

「やったね。」

「RINKO さん、RUI がマリッジリングをはめたビジュアルを撮りたいって。」

「さすが RUI ね。マリッジリングって？」

風輝は凜子の前に跪いてギフトボックスを開く。

ダイヤで囲んだリングが輝いていた。

「RINKO さん、結婚式はまだだけどどうかリングは受け取ってください。俺の一生すべてをかけて大切にします。」

「風輝は最高の贈りもの、そしてここにいる命も……。こんなに幸せで怖いくらい。」

「俺にとって凜子さんは最初で最後の愛する人だから。」

凜子の頬を風輝の両手が包み込む。そして唇に触れた。

ふたりの薬指にマリッジリングが輝いていた。

「この写真最高にクール！結婚指輪をはめた手を重ね合わせるなんて、一気に流行しそうよね。」

「モノクロってのがいいでしょ、二人にピッタリで。奏子、さっそくサイトのアップしよう。」

ダイヤモンドがはめ込まれたマリッジリングを左手の薬指にはめた二人の手が重なり合うモノクロのビジュアルは、あっという間に話題になり SNS を騒がせた。

「子守歌にマリッジリング、そして充電期間って FUKI が結婚したってこと？」

「産休って噂もある。」

「それにしてもこのカッコいいビジュアルは RUI しか表現できない。是非真似しよう！」

「凜子、順調に成長している。高齢とは思えないほど幸運な妊娠だ。」

「蒼のおかげだね。感謝している。」

「既視感があるとか・・・悪夢は続くのか？」

じっと見つめながら凜子は蒼の顔を見据える。

「愛する人を失うことは最大の不幸でも、神はまた私に愛するひとを与えてくれた。

だからこそ、その人にやさしく温かく接し、いつも共にいて互いに尊敬しあう。

失った恋人と同じように喜ばせ、ときには傷つき合うこともある。

わたしの凍った心が、その人のおかげで生き返ったから・・・。

だからその人を心から愛したいと思う。

蒼もわたしはまた幸せになれるって思うでしょ。」

凜子は秋月のことを思い出したのかもしれない。

ひとりで相当に苦しみながら、年月をかけてやっと凍った心を溶かしてくれる新しい愛に、巡り合ったんだな。

心配かけまいと記憶が戻りつつあることを言わなかったのか・・・。

薬に頼らず、心理療法も無理にしないで、自分自身で再生する・・・凜子は強靱でいて美しい。

「辛いときは無理しないで欲しい。凜子には幸せになって欲しいから。」

「幸せだよ。素晴らしい家族に愛する人、そして大好きな仲間がいて、いまは新しい命がここにいるから。身が引き裂かれそうに辛いことがあっても、時間が過ぎれば過去になる。そう思えるようになったから。」

あと3カ月もすればここも相当にぎやかになる。

みんなに愛される新しい命の誕生を誰もが心待ちにしている。

充電期間1年を経て、風輝の復帰をお祝いするようにパッヘルベルのカノン、プッチーニのオ・ミオ・バッピエーノ、グノーのアヴェ・マリアとハッピーなクラシック曲をメインに、今迄に聴いたことのない素晴らしいアレンジでアルバムが発表された。

現代風に近代楽器も取り入れ、軽快で幸せ感満載の曲はあっという間にチャートを独占する。
ファミリーに人気のクルマ、コスメブランドのCMで流されさらにヒートアップ。

そしてメインビジュアルは、Lullabyのマリッジリングをはめた重なり合う二人の手に、
もう一つ、ちっちゃな手が加わった……

話題性MAXなのはもちろん、各方面に取材が殺到した。

「風輝の家族????」

「風輝は結婚して赤ちゃんが????」

「ただのビジュアルじゃないかな……曲に合わせて。」

「さらに高みへとのぼっていくA-LIVEに感動！」

「こんな魔法みたいなアレンジはA-LIVEしかできない。」

など賞賛と憶測が飛び交っている。

これからさらに忙しくなりそうだ。

凜子は赤ワインを揺らしながら、幸せ感にどっぷりと浸る。

身が粉々に碎けるようなことも、いずれ時が過ぎれば過去となる。

今日が過ぎれば明日……

恋人との哀しい別離、そして風輝との出逢い。

運命に抗うことなくすべてを受け入れることができた自分を褒めてあげたいと思う。

「それにしてもこの幸せ感満載アレンジは最高傑作ね。風輝がパパでよかった。」

国境を越えたボーダレスなライフスタイルはまだ続きそうだ。

エピローグ

「翔、絵が欲しい。ここのギャラリーにある。」

凜子は翔に名刺を渡した。

「絵??どんな・・・行けばわかる?」

「連絡しておく。」

「こっちで買うなんて珍しいな。」

「以前、そちらのギャラリーにある絵に魅入られて・・・あの砂漠のような砂色が重なり合う・・・」

「はい、わかります。」

「まだそちらにありますか?ぜひ欲しいのですが。」

「お待ちしております。」

「兄が行きます。中華街にある翠月楼のオーナーです。よろしくお願いします。」

「あの有名な翠月楼様ですね。はい。承知しました。」

そういえば値段も知らない・・・翔だからいいか。額含めて90cm四方位で新人画家って言ってたし。

1週間後、ギャラリー推奨の額に入替えられた絵が届いた。

さっそく新居のリビングへ。スポットライトとピクチャーレールは設置済みだ。

「凜子、この絵の雰囲気はRONだよな。」

「それで魅かれたのかな。」

「実はギャラリーのバイヤーによるとRONの3年前の作品だって。」

「翔のオフィスで出会う前にすでに巡り合っていたんだね。」

「縁ってすごいな。感性って呼び合うんだな、きっと。」

壁に掛けられた1枚の絵画から放たれる熱量に生命力が感じられる。

熱いレッドクレイを舞うファビオとファイヤーオパール

真っ白のシャツを纏い被写体を追うYUKI

温かい家庭を夢見た秋月の琥珀とイエローダイヤ

そして輝く黒曜石の風輝とのこれから・・・

読者が選ぶ、推しフレーズ

読者お気に入りのボーダレスなロマンティックシーンをセレクトしました。

なんでいきなり初対面のわたしを連れだしたの。ひと目惚れとか言ってからかわないで欲しい。

視線が捉えた瞬間、身体が熱くなった。そう、血が逆流する感じ。まさに運命だね。
あなただけしか見えない。

黒曜石の瞳に凜子が映る。
さすが音楽家、詩的なセリフが似合う。彼にならからかわれても夢と諦められる。
たった数時間でもこのキラキラは忘れられない。

テーブルには見映え美しい上海料理が、ヘレンドのシノワズリシリーズに盛り付けられている。
ヘレンドグリーンに料理が一層映える。
琥珀色に輝く紹興酒はバカラのマッセナ。甘い香りが鼻腔に広がり舌がとろけるようだ。

翔の部屋に大きな絵がかけられている。
引き寄せられるように前に立つ。
まさに空間と一体化したような絵だった。
マットな白からパステルカラーを重ねて塗ったような抽象画……。
ひとが纏う空気感と五感のような、それでいて柔らかく心が癒される……。

翔との2ショットのおかげで、彼の想いが聞けてうれしい。ジェラシーって恋の最上級スパイスね。

凜子はずつま先立ちになり、風輝の背中に腕を回して唇にそっと触れた。
突然のキスに風輝は一瞬戸惑う。
そして風輝は顔を傾けて、凜子の頬を包み込みながら唇を開いていく。
ずっと思い続けていた凜子とのキスに熱量が上がる。全身鼓動が響くようだ。

もう、起こってしまったことは変えられません。拒絶されても、受け入れてもらえなくても凜子さんを待ちます。だから翔さんも俺たちを見守ってください。
記憶が戻るのを恐れることはありません、いまの凜子さんも過去の凜子さんも俺の想う凜子さんだから……
いままでも、いまも、これからも変わらない。

演奏前に FUKI からメッセージがはいった。

RINKO さんのために演奏するよ。今日の曲はリスト、エルガー、ブラームスと俺の好きな作曲家で、凜子さんのためにアレンジしたよ。愛してる。FUKI

愛する人を失うことは最大の不幸でも、神はまた私に愛するひとを与えてくれた。

だからこそ、その人にやさしく温かく接し、いつも共にいて互いに尊敬しあう。

失った恋人と同じように喜ばせ、ときには傷つき合うこともある。

わたしの凍った心が、その人のおかげで生き返ったから・・・。

だからその人を心から愛したいと思う。

蒼もわたしはまた幸せになれるって思うでしょ。

凜子は赤ワインを揺らしながら、幸せ感にどっぷりと浸る。

身が粉々に碎けるようなことも、いずれ時が過ぎれば過去となる。

今日が過ぎれば明日・・・

恋人との哀しい別離、そして風輝との出逢い。

運命に抗うことなくすべてを受け入れることができた自分を褒めてあげたいと思う。